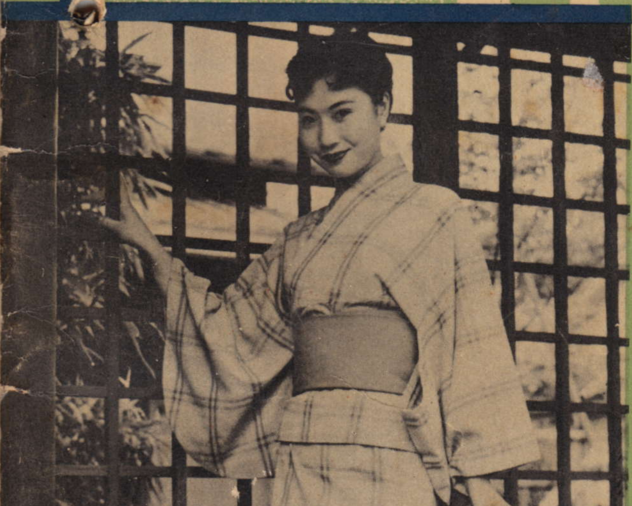
昭和30年 9 月15日印刷
昭和30年 9 月20日発行　昭和26年 5 月17日　日本国有鉄道特別扱承認雑誌第1971号

NHK

女性教室

新しい

和服



講師　大塚末子

10

目次

講師　大塚末子

モデル　東京放送劇団…幸田弘子・武田国久・本多文子・横山道代

☆和服についてのメモ☆

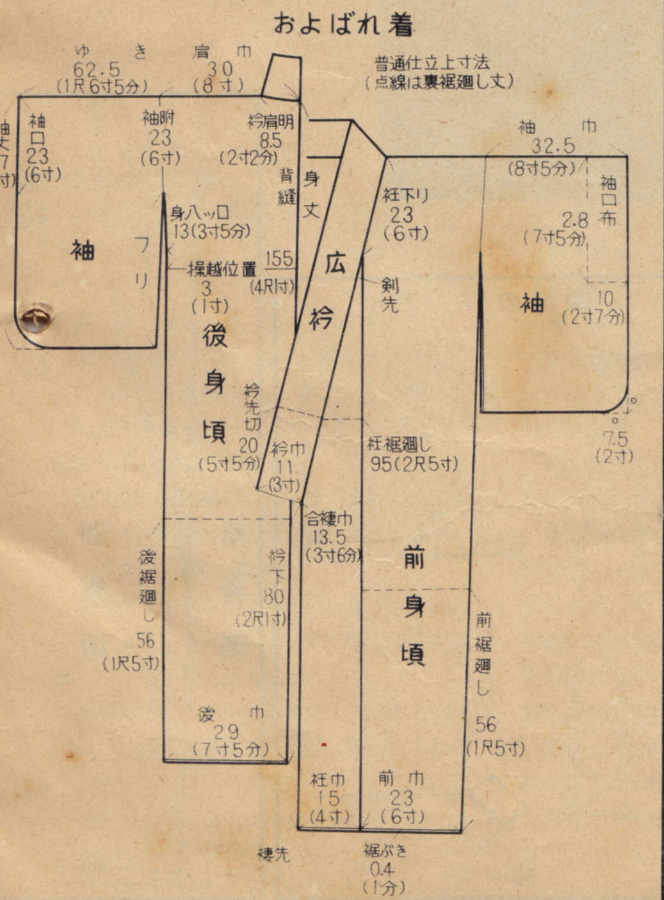
表紙・川上 新…カット・増田悟郎　　写真撮影　高橋正雄・森沢謙一

新しい和服

講師　大塚末子



ワンピースのおよばれ着



昔からおよばれ着には、縮緬がつかわれています。縮緬は染が美しく出来るのと、縮緬の生地から生れるシルエットが女の人にとって一番好まれるからです。

およばれ着、社交着としてこの縮緬に絵羽模様や、つけ下げなどの高級な染方から友禅や、小紋染などの大衆向きのものなどが染め出されています。

絵羽づけは、改まりすぎて出かける場所が限られて来ますが、写真のような小紋染だと場所に融通性ができて来ます。

出先にもよりますが、最近では着物の扱いが大変簡略されて来ましたので色と柄、生地を上手に選べば範囲の広い着方が出来ます。

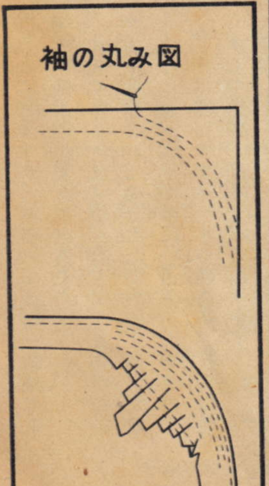
写真は薄いナチュラルの地色に、紅型の松くずしの模様が染め上げてあります。

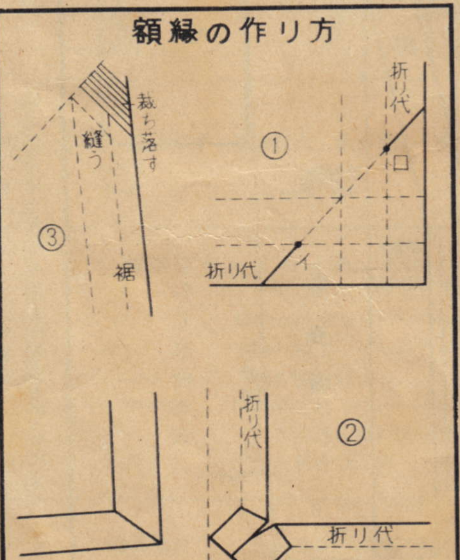
裾廻しは、薄いローズの錦紗をつけて、帯はさび朱に金を織り出した袋帯をしめてます。

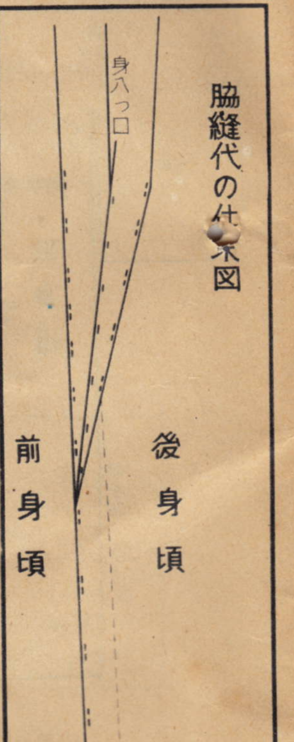


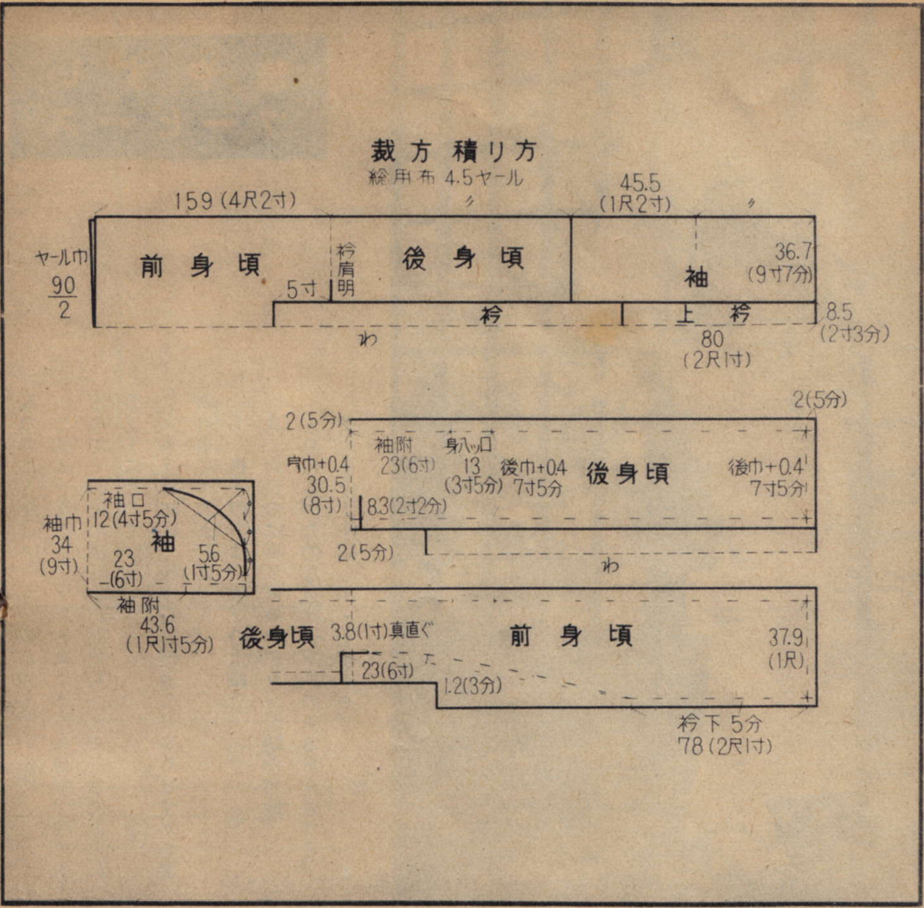
洋服地のワンピース

　生地は化繊のスフで洋服地に使うY幅で作ってみました。下[illegible]四ッ身裁ちにしたものをそのままで衽はつまんでありません。衽に縫目がないと柄がくずれない上に、仕立も簡単です。
　四ッ身裁は、用布が少くて済みますし、軽くて着やすいものです。
　袖丈や袖の丸みは、着る人の身長によってきめましょう。
　要尺はヤール幅で四・五ヤールです。









☆裁方の時の注意☆

衿の布として前身頃の方へ５寸(18センチ)裁ちこんでいるところを、７寸（25センチ）までにして下さい。

☆縫い方☆

袖＝袖口標から袖下を中表に縫い合せます。袖の丸みの仕末は図のように地縫いの外を丸みに沿って強糸で針目を揃えて丸みの間だけ縫います。(部分縫参照)

袖下縫代を内袖に返します。丸みの所は丸みがきれいに落付くように糸を引き、襞をとじつけます。(部分縫参照)

身頃＝後中央をつまんで縫います。背縫代の多いときは５分（２センチ）位に切って袋縫か二度縫いをします。

脇縫は前後の脇を中表に身八ツ口から裾まで縫い、縫代は前身頃に折り、図のように仕末します。

袖付け＝肩山と袖山を合せて中表として縫い、袖付どまりには力布をあてます。

袖付縫代は割り、袖は振りも続けて折りぐけか、又は耳ぐけにして押え、身頃は身八ツ口、脇の縫代をつづけて押えます。

衿下をくける＝衿下は三ツ折りにして、裾との角はガクブチにします。(図参照)

裾ぐけ＝三ツ折りにして本ぐけにします。

衿付け＝衿付側縫代を折り、背縫と上衿中央を合せて待針を打ち、衿肩明廻りは十分にゆるめます。

折山よりきせ代分だけ内側を縫います。衿肩明きに三ツ衿（首廻り）をとじつけます。

衿幅の標付をする＝衿肩廻り１寸５分（5.8センチ)、衿先で２寸（7.5センチ）のバチ衿にします。衿先は衿先から２分（６ミリ）外を縫い、衿先縫代を裏衿の方へ倒し、次に衿付の縫代をその上に折って表に返し、衿先を整え、衿を裏身頃にくけつけます。(図参照)

共衿＝共衿の両端を本衿に縫いつけます。衿の廻りを折ってきせ代の内をくけつけます。

共衿の裏側の仕末は衿幅より２分内側を折って本衿にくけつけます。

仕上げをします。



着やすい ツーピース

長着に対して着やすいように上下に別れているきもののことを、ツーピースと呼んでいます。
これは上着にも、下のスカートにも紐がつけてあるので、和服に馴れない人でも一人で上手に着られるようになっています。
スカートには、後中心に紐通しがありますから絶対に着くずれがしません。

1. 格子の方は、スフの化織。
2. 六頁のはローズのナイロン混紡の布地。

どちらも理知的な近代センスのある日常着です。
要尺＝ヤール幅　四・七ヤール。

☆上着の縫い方☆

袖＝袖口標から袖下を中表に縫い合せます。(袖の丸みは袖の部分縫参照)

袖口は三ツ折にくけます。

背縫＝後中央をつまんで縫い、衿肩明を右に持って手前に返します。

脇縫＝前後の脇を中表に身八ツ口から裾迄縫い、縫代は割ります。

袖付け＝肩山と袖山を合せて中表として縫いますが袖付止りには力布を当てて縫います。

袖付縫代は割り、袖は振も続けて折ぐけ又は耳ぐけで押え、身頃は身八ツ口脇の縫代をつづけて押えます。

衿付け＝衿付側縫代を折り、背縫と上衿中央を合せて待針を打ち、衿肩明廻りは十分ゆるめます。

折山よりきせ代分だけ内側を縫います。

衿肩明に三ツ衿をとじつけます。

衿幅の標付けをします。

衿先＝衿先から2分外を縫い、衿先縫代を裏衿の方へ倒し、次に衿付の縫代をその上に折って表に返し、衿先を整え、衿を裏身頃にくけつけます。

共衿＝共衿の丈の両端を本衿に縫付けます。

廻りを折って、きせ代の内をくけ付けます。

紐＝人絹、メリンス布の幅3寸、丈2尺3寸のものを、幅二つ折にして廻りをミシン縫とし、表に返します。

紐付は各自の寸法に合せてつけます。

仕上げをします。

☆スカートの縫い方☆

背縫い・脇縫い＝中表に標を合せて待針を打ち、ミシンで背を縫います。腰を右に持って手前に片返します。

脇をつまんで縫い、前身頃に返します。

腰布＝木綿、キャラコ地で幅4寸(15センチ)、長さはスカート幅と同寸、裁ち目の場合には二つ折りとして押えミシンをかけます。

腰布の仕末が出来てからスカートと合せて縫い、3分控えて整えます。

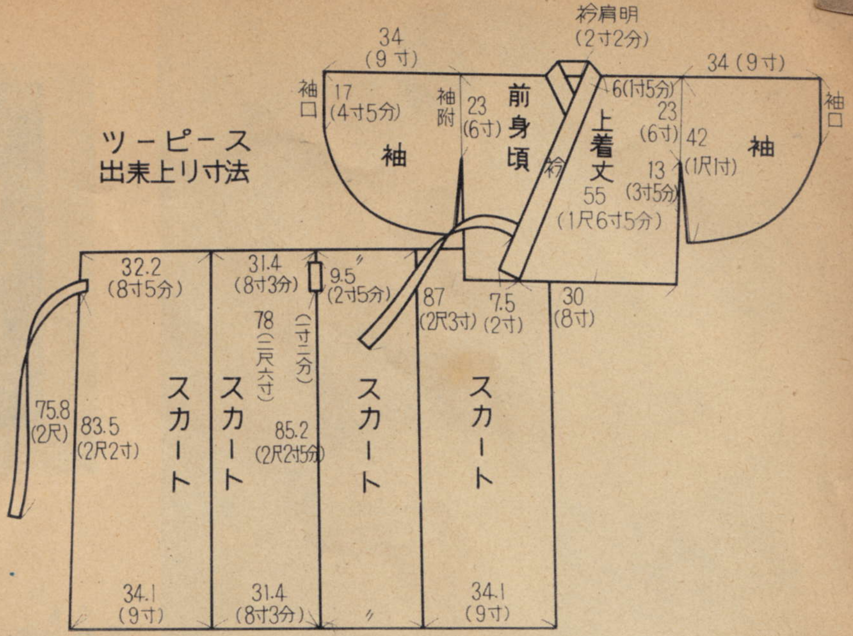
前端裾＝上部を三角に折り込んで三ツ折ぐけにします。裾の角は額縁にします。(14頁参照)

千鳥り＝腰布を背、脇の縫代に千鳥がけでとじつけます。

紐＝人絹、メリンス布で幅3寸(11センチ)、丈2尺(76センチ)のものを、幅二ツ折りにして、廻りをミシンをし、表に返します。紐付は各自の寸法に合せてつけるが背の紐通しは前の縫付けより5分上にします。

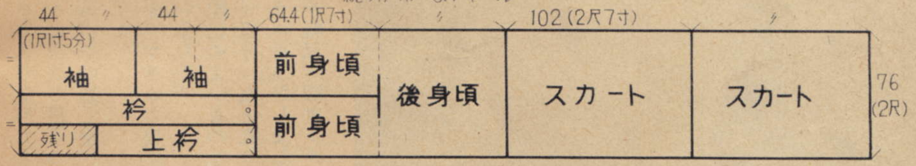
仕上げをします。

ツーピース
出来上り寸法



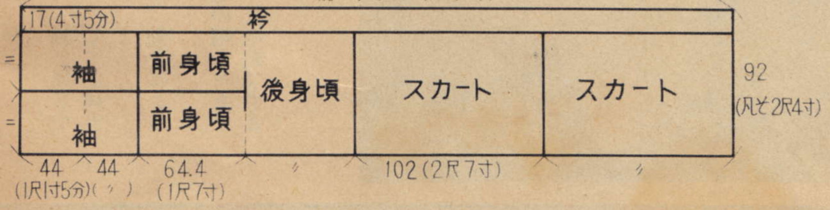
シングル巾の裁方積り方

総用布 5.7ヤール

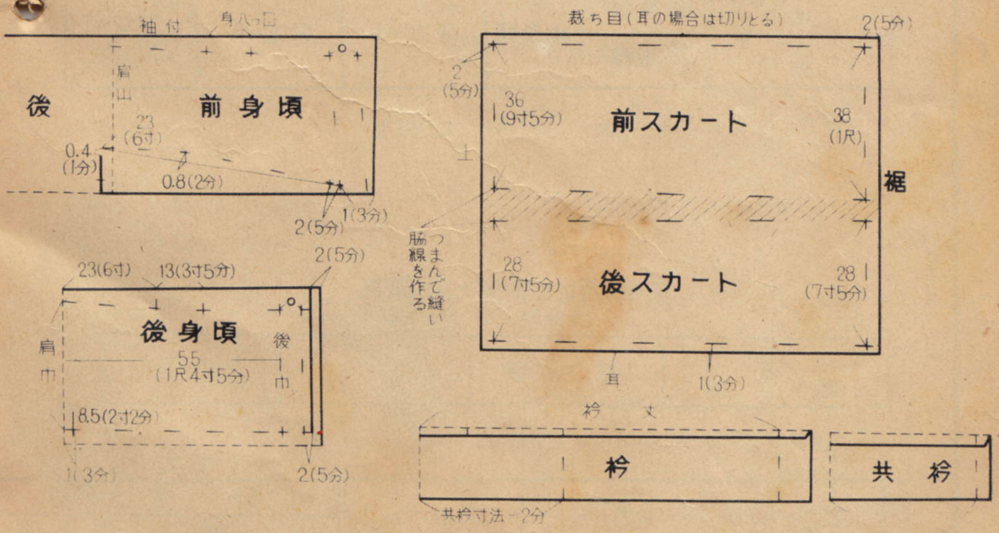


ヤール巾の裁方積り方

総用布 4.7ヤール



ツーピース標付け





ペプラムのついたツーピース

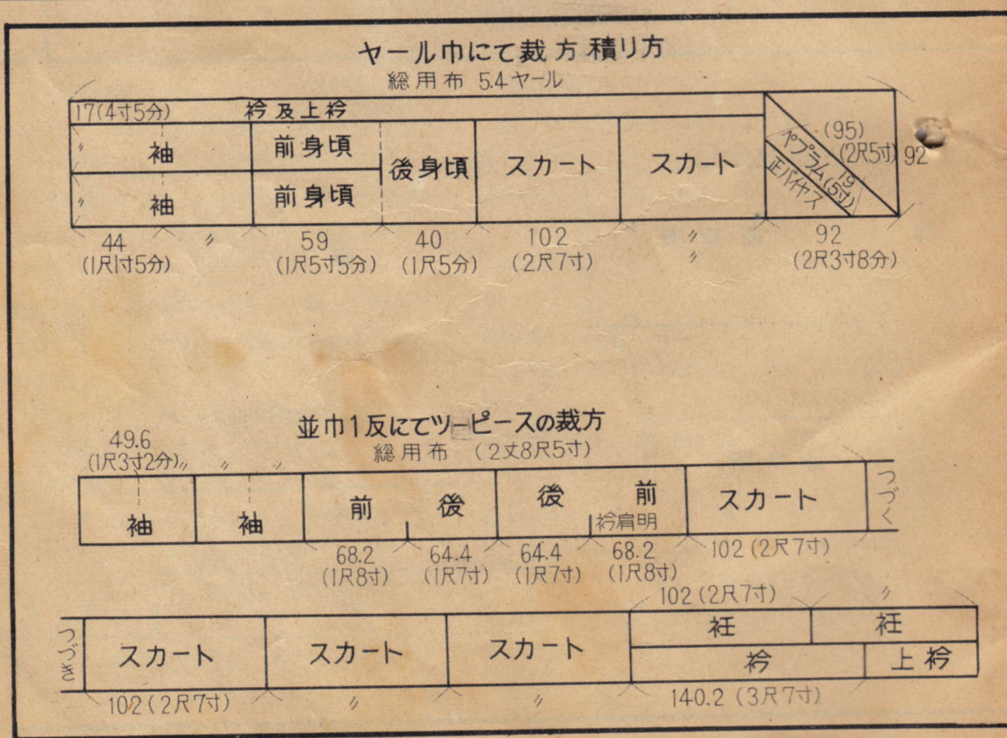
これはツーピースの変形です。

前のスタイルは四頁の格子のツーピースと同じですが、後のお端折りの感じをペプラムにして立体感を出して見ました。

帯と同じ布をペプラムの裏に使って、動きによる美しさをねらいました。

帯は着物と配色のよいものを、普通の幅よりも、もっと細く二寸五分（九・五センチ）位の幅で小さく結び、ペプラムを生かしました。

要尺＝ヤール幅五・四ヤール



若い人の好きな絣のツーピース

——並幅物で——



若い人の好む絣も、ツーピース仕立にしてみました。

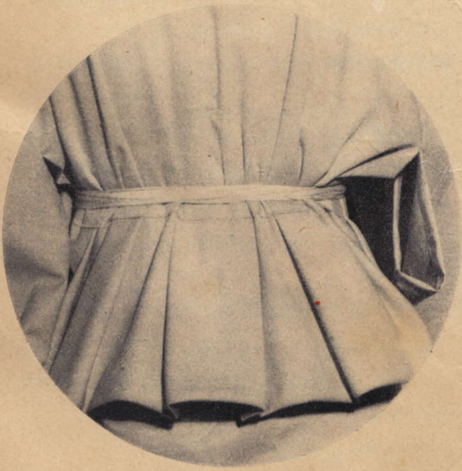
スカートには、衽をつけて打ち合せを十分にしましたが、上着は衽を使っていません。

☆縫い方☆

スカートの前身頃に衽をつけます。

前幅6寸（23センチ）、衽幅裾で4寸（15センチ）、上で3寸5分（13センチ）にします。

他は4頁のツーピース参照。



☆ペプラムの作り方☆

ペプラムは正バイヤスに裁ちます。

ペプラムのところと、前身頃の裾のところには表布に配色のよい裏布をケヌキ合せにつけます。

ペプラムの中には張のある芯を入れます。



茶　羽　織

正装には、羽織は着ないことになっています。

ちょっと羽織がけで、というように略式にされていますが、保温をかね、長着の上に羽織る色や柄の異ったものから生れるハーモニーが一つの美しさを持つところから、この頃では羽織は立派な服装の一つとなっています。

茶羽織、十徳といって短かい羽織は、茶人の愛したもので、昔からあったのですが、その短かさを近代的に生かして、機能と経済を持ち合せたところに今の茶羽織があります。

上＝紅型小紋の茶羽織と帯をおそろいにしてみました。袖丈1尺1寸（42センチ)、羽織丈1尺8寸（69センチ）で、袖は大げんろくです。

下＝茶羽織というよりも着丈を2尺2寸にしてみたものです。

ここで袖丈と着丈のバランスを見てほしいものです。

袖丈は1尺2寸（46センチ）にしました。



☆縫　い　方☆

袖＝1.　裏袖布に袖口布をかけます。

2.　表裏の袖口を中表にして合せます。

3.　袖口は四ツ留にします。

4.　袖口から袖下を四ツ留の糸でつづけて縫い、袖の丸みを通して袖下のふりのところまで縫います。袖幅の2寸（7.5センチ）手前で、表2枚、裏2枚と別々に縫います。

5.　丸みの仕末をして表にかえします。内袖の方へ袖口から躾をかけます。

6.　袖ふりを縫います。

身頃＝表布と裏布を接ぎ合せます。背縫いをして、背とじをします。

両方の脇を縫います。その時、裾のはぎ合せを正しく合せて、裾の折り返しを同じ寸法にします。

脇とじをして身八ツ口を四ツ留して縫います。

袖付け＝袖は袖付を四ツ留にして、表袖、裏袖を別々に縫います。袖の方へ折りを返します。前身頃の表裏を引き合せてしつけでとじ、乳付のところへ羽織紐をつけます。

衿付け＝（衿は先きに図のように折っておく）身頃の内側から背縫中心にして衿肩廻りに衿丈の中心を待ち針で合せ、衿肩廻りから乳つけまで少しゆるみかげんにして、乳から裾までは平らに待針をうちます。

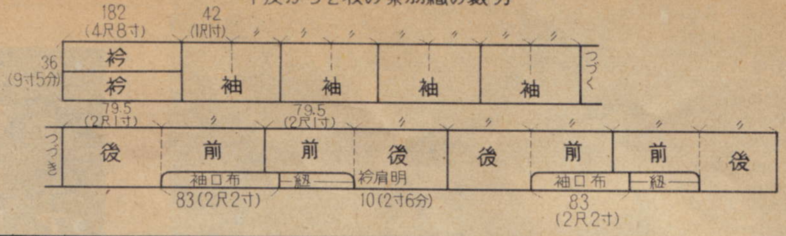
衿先きの仕末＝衿の芯はなるべく厚地のものを入れます。

衿先きは第1図のように裏衿を出し、表衿は向う側へ折りまげます。その時表衿の方を少しゆるめぎみにして、衿先きの縫ったところより1センチ先きを布目にとおして縫います。

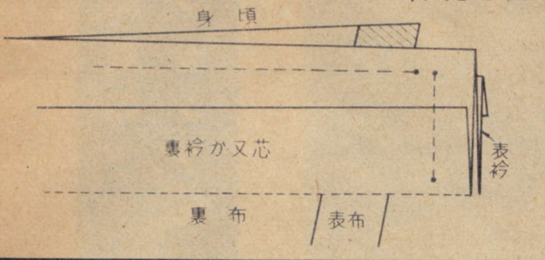
衿先きは第2図のように折ってとじつけます。表にかえしてくけます。その時、背の中心と、乳づけのところに先きに針をうつて引き合せます。

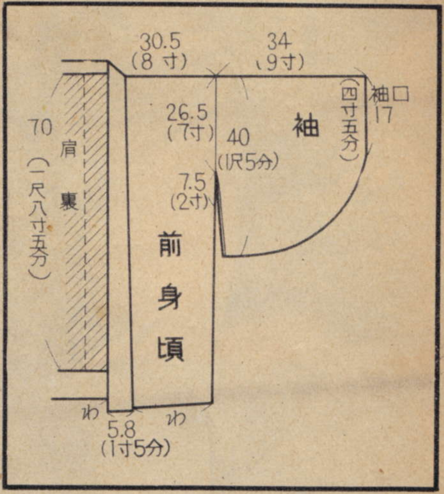
衿ぐけをして出来上ります。

1反から2枚の茶羽織の裁方

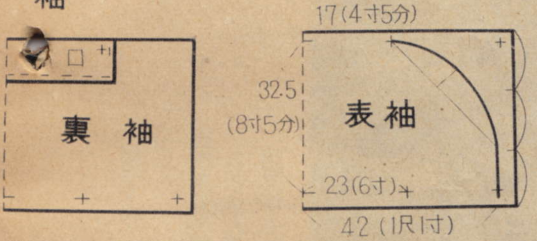


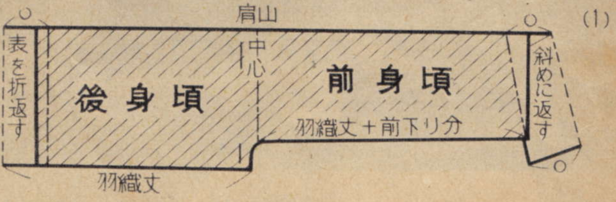
衿先1図



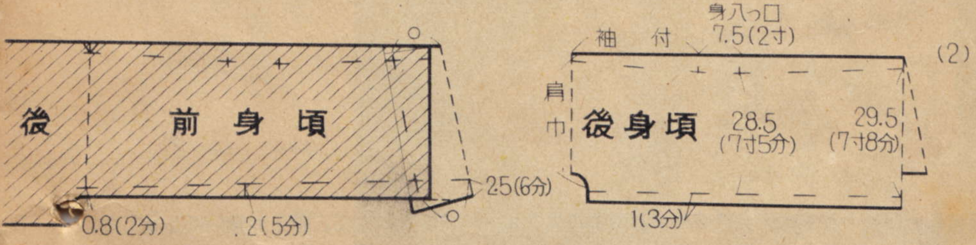


袖

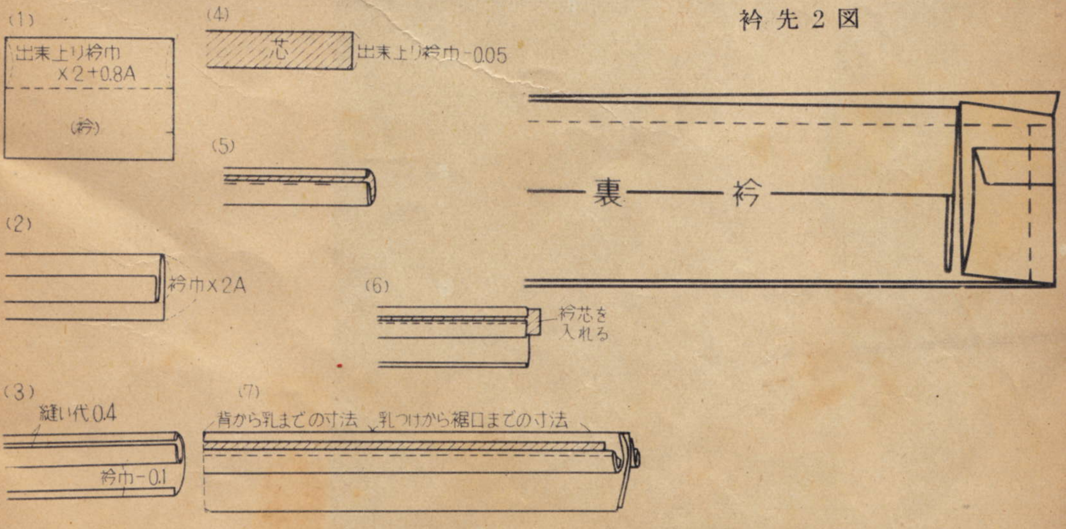




身頃



衿先2図



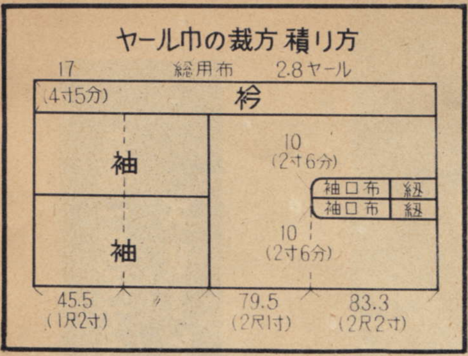


変り型茶羽織

帯と羽織裏のアンサンブル

節織紬の無地の長着に、こげ茶のお召の羽織裏を朱色の絣お召にして、帯とお揃いにしました。

広幅の化繊で作った格子の茶羽織



広幅のスフの格子で作ってみました。
こんな大柄のものの場合はなるべく袖付や、背の縫目は柄を合せるように気をくばりましょう。

要尺＝ヤール幅二・八ヤール（縫い方は八頁参照）





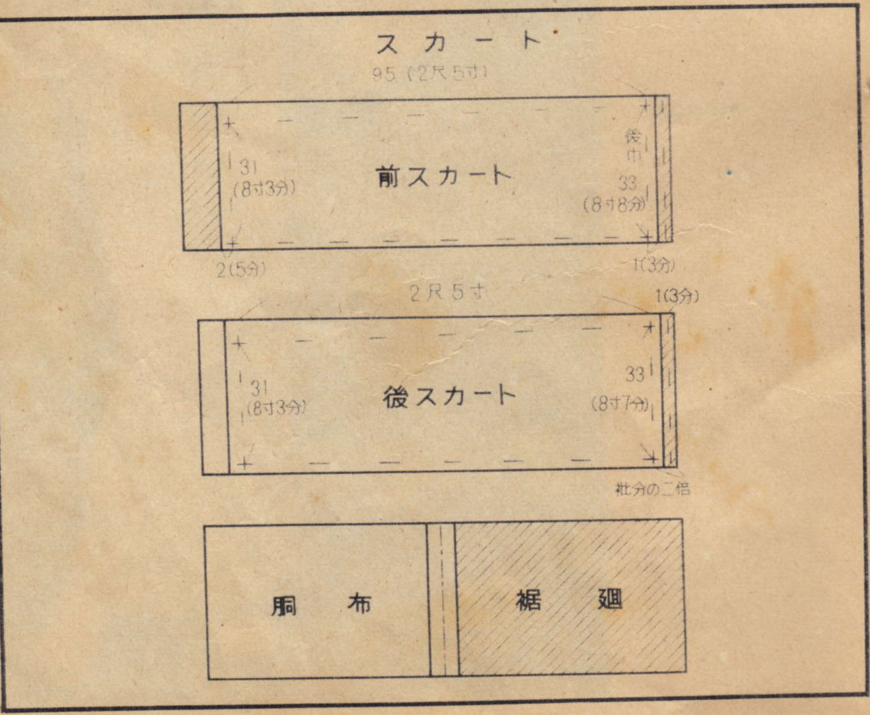
並幅一反でできるスリーピース

並幅１反の要尺で作ったスリーピース（三ツ揃い）です。

スカート、胴着、茶羽織からなっています。茶羽織とスカートは、これまでと同じ仕立て方ですが胴着は一ツ身に衽と衿をつけ、身八ツに半幅の当布を入れました。

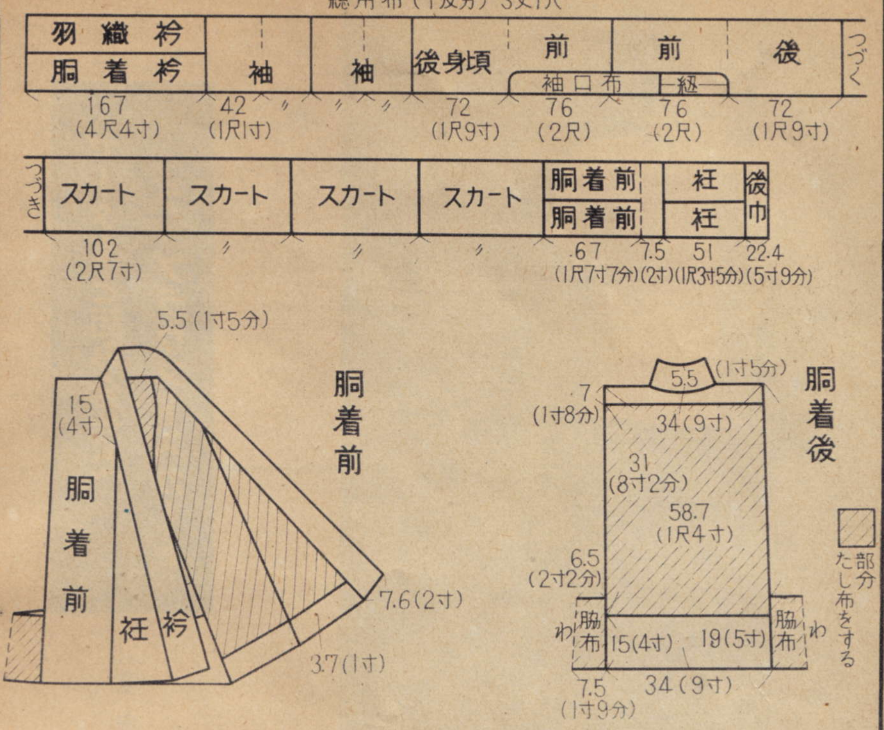
ごらんの通りおついの茶羽織を着たようで、見た目には別に変りがありません。

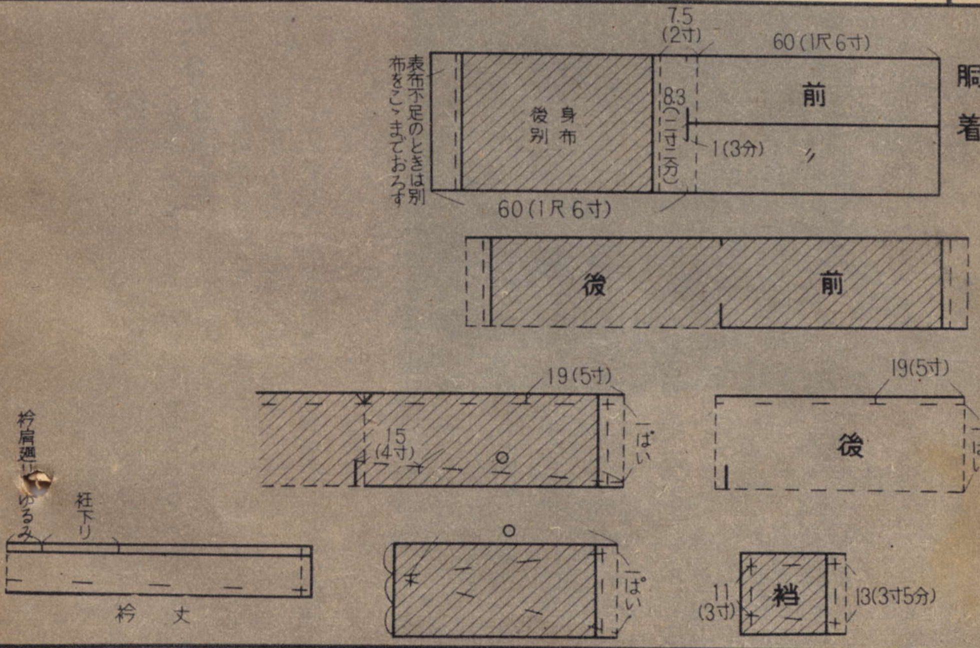
保温も十分です。



スリーピース裁方 積り方

総用布（1反分）3丈1尺





○スリーピースは袷仕立なので裏布として、スカートの裾廻し、茶羽織の裏地、胴着の後身頃、胴裏布、脇布がいります。羽織裏布と胴着の後布とは同じ生地を用いるとよいと思います。

○総用尺の寸法によってスカートの上部に別布をはぎ合せてもよろしいです。

☆スリーピースの縫い方☆

羽織は茶羽織の項参照。

胴着＝胴着は後身の別布を表布と接ぎ合せて、表裏を胴接ぎして脇へ襠の布を入れ、脇縫をします。（脇布も表裏をはぎ合せておく）次に衽（これも表裏はぎ合せておく）をつけます。

衿はバチ衿につけます。

スカート＝後身頃の裏だけ裾廻しと接ぎ合せます。表布を背縫い、脇縫いして、裏も同様にして裾を合せ、ふきを出します。その時前身の裾角に褄を作ります。（褄の作り方は23頁参照）衿下を縫って、スカートの上を表裏引き合せて（中とじをする）、スカート丈に折ってくけます。

表布の方へ紐通しを作り、紐をつけます。

セーターと組み合せた ラップラウンドスカート

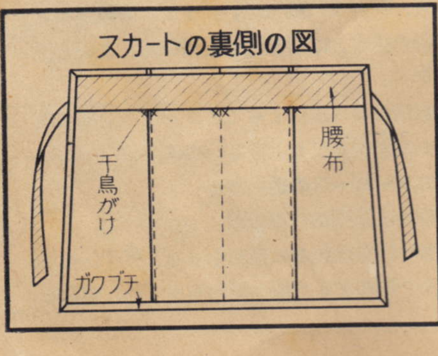
（まきスカート）

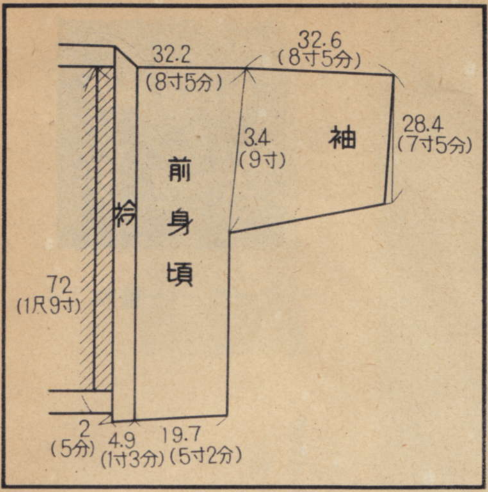


スリーピースの着方

このスカートは、ラップラウンドスカート（巻スカート）といって洋服にもありますが、このようにセーターと組んでもおかしくないと思います。おつとめから帰って長い和服用の巻きスカートに変えれば、暖くもあるし、ナイロンの靴下の寿命も助かりましょう。

4頁のツーピースのスカートの裏





洋服の上にも羽織れる はんてん

こんなはんてんを着て見るのも何か心くつろいだ家庭着の楽しさがあるのではないでしょうか。

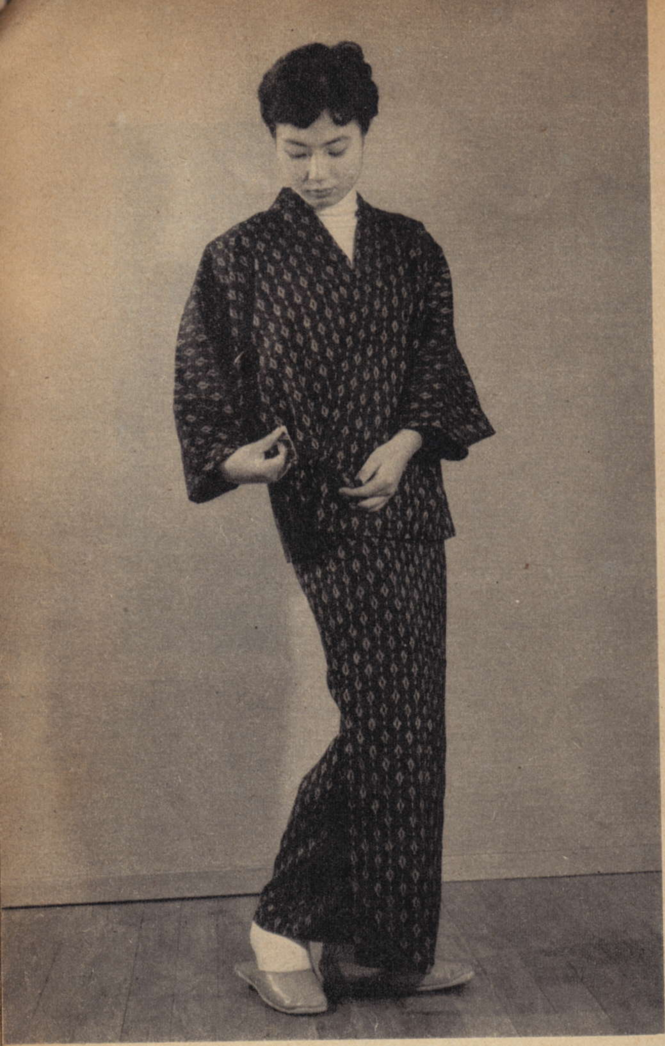
茶羽織を着てもよいし、袖無しの羽織を着るのもよいと思います。

洋服の下着のままで着られる和服である限り、上に羽織るものもたのしく和洋両方に応用したいものです。

（縫い方は茶羽織の項参照）

スリーピースの着方



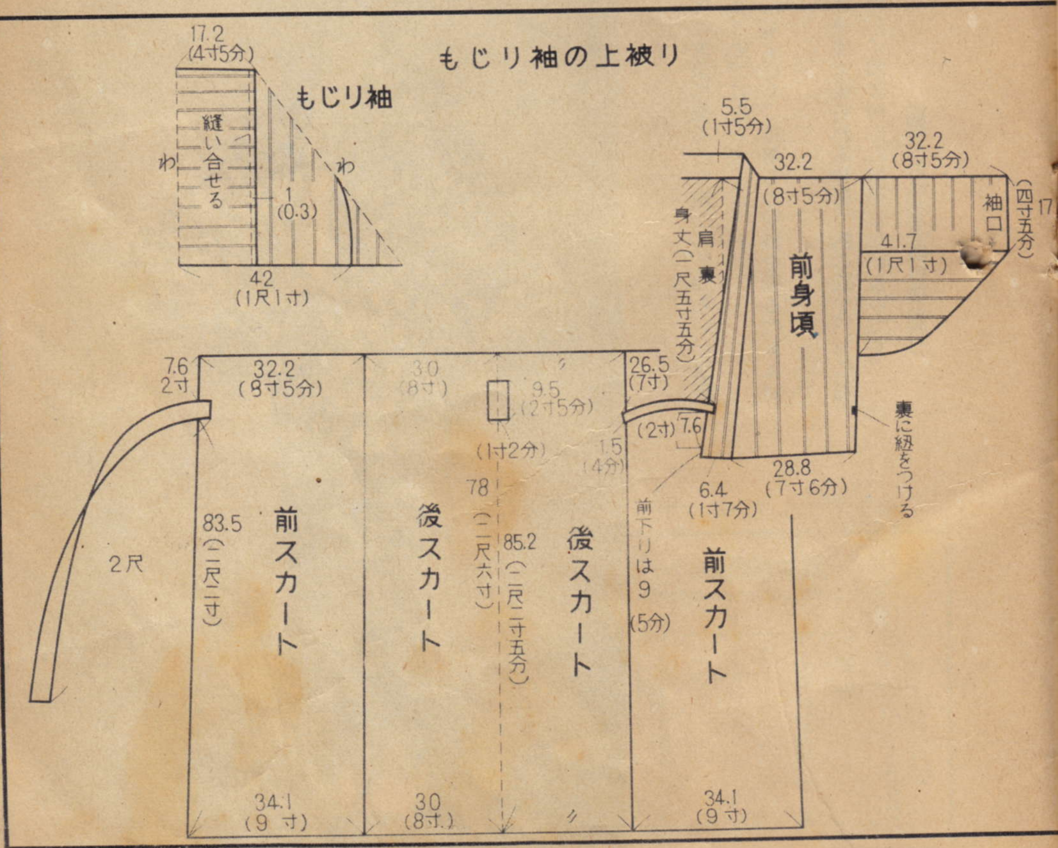


もじり袖の上被り

うわつぱ

―セーターと重ねて―

上被りつきのスリーピースに、胴着の代りにセーターを着て見ました。
これも着方、組み合せ方の一例です。



洋服にも重宝な ポンチョ



要尺＝Y幅一ヤール半

外国には平な布に首の入るだけ開けてあるもので、ポンチョというのがあります。

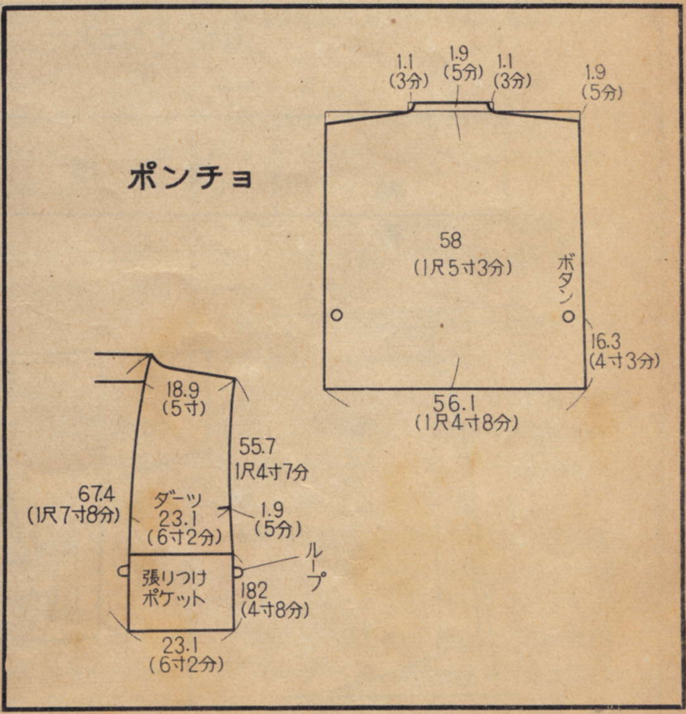
これは裃（かみしも）のようになっていて、前中心と脇とを、ボタン掛にして両前にポケットをつけてあります。

うすら寒い日に実用をかねて羽織るものです。

☆**縫い方**☆

前身頃にまず、ポケットをつけます。脇・前身の仕末は折りぐけにします。両脇・前、左側にループをつけ、片方へボタンをつけます。







リゾートウエアー

—帯なしツーピース—



参考

スカート丈を短くして上着丈に併行して裾を斜目にしてみました。

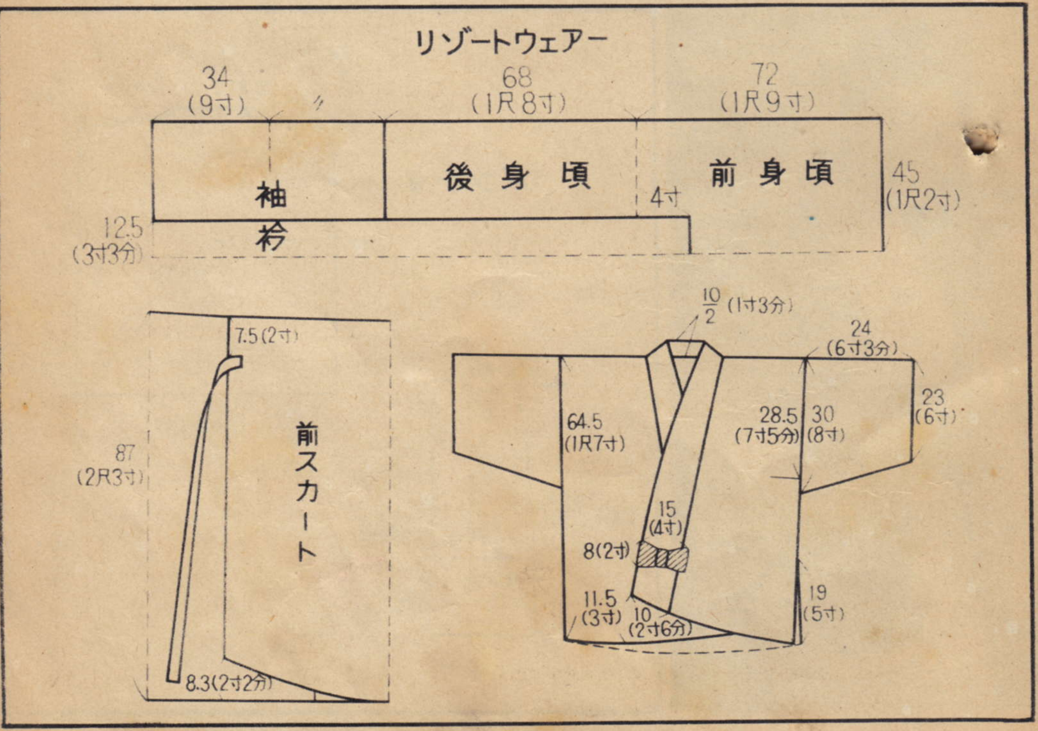
脇に馬乗りをあけて、衿付けは広衿にして、胸合せを深くしました。

脇の紐結びのかわりに共布でボウを作って若さを出しました。

これは夏生地ですが、ウールや化繊などで作るとおもしろいものが出来るでしょう。

衿は広衿に作って、衿中心にスナップをして半分に折り、胸のところでは、自然に広げますと、胸の形が大変よろしいです。

ボウはお好きな形に作りましょう。



和服についての メモ

大塚末子

☆和服地と幅☆

和服といえば1反というほどに親しまれていますが、9寸5分位の布幅です。1幅とその½幅とに裁ったものから縫い上げたのが和服の形態ですが、洋服の流行から、必要なだけ買える便利な事が、1反を買わねばならないものにとって非常に羨しく、又広幅のおかげで要尺も少くて済むことなどから、和服も広幅を要求してきています。最近若い人達の体格が大きくなって裄丈などの関係から現在の小幅では用をなさなくなりました。私は、日常着は広幅物、殊にヤールものをおすすめしたいと思います。

尚冬もひとえで過せるように洋服に使う厚地のものを私は欲しいと思います。

☆手縫いとミシン縫い☆

和服といえば手縫いという観念が今尚残されていますが、それはミシンという重宝な機械の無い時代のことで、洋服はミシン、和服は手縫いと思われているのがむしろおかしいことです。

丸洗いの出来るウール、化繊の広幅物や、ゆかた、寝巻、ふとんはどしどしミシンで縫いましょう。

半返しされていたお召しや、ちりめん類のコートも今ではミシンで縫われているのですから。

☆和服のアクセサリー☆

和服用のアクセサリーといえば、帯〆、帯揚げ、半衿、腰ひも、履物、ハンドバックといろいろあります。洋服の場合は装飾が本位になっていますが、和服は実用をもかねています。

○半　衿

半衿は、昔は抜きえもんの着つけに衿おしろいをしたので衿を多く出しました。そんなことから、縫いとりのした凝った美しい半衿などが喜ばれましたが、この頃のように衿をつめた着方をすると半衿をたのしむということがなくなって、殆んど無地それも薄色のものになっています。無地のきものなどには却って美しい半衿を考えて見たいと思います。

○帯あげ・帯〆・羽織・紐

帯といえば、帯あげも、帯〆も切っても切れぬ縁です。ただ、帯あげは帯あげ、帯〆は帯〆と、個々に考えるものでなく、その帯にとけ込んで美しくなるものであって欲しい。

帯あげも総しぼり、柳しぼりなどや、無地ものが帯の品種によって使いわけしなければ、せっかくの美しいものも死んでしまいます。

帯ときものの間からほのかにのぞくやわらかい色気、これは和服を好む人にとって、嬉しいことです。但し細帯のふだん着には却って邪魔になります。

帯〆も同じことがいえます。ただどれにでも融通出来る色を持っていることは、上手な扱い方といえましょう。

○羽織のひも

帯があって帯〆があって羽織ひもが重なって来ることは、ちょっとゴテつくが、羽織のひもは羽織の形をつくる上からどうしても必要なもので、なるべく羽織の布と同じ系統の色が、調和してよいと思います。

茶羽織の紐が共布だというのもこんなところからきているともいえます。

○腰ひも、伊達巻

どうせ見えないからと言われるもののなかに腰ひもと伊達巻があります。両方共薄色のものがきものには美しく感じられます。

腰ひもは結び目のゴロつかぬようにやわらかいもので、締めているうちに解けてこぬものがよい。

伊達巻は、昔から博多や錦紗で前に芯の入ったものがありますが、どちらもよいと思います。

○足　袋

白く洗えてアイロンの当った、ぴったり足にあった足袋をはいた姿は見るからにほれぼれとしてきます。

近頃は、洗っても縮まぬように布地もよくなっていますから、自分の文数通り買ってよいと思います。

高いようでも有名店のものは仕立もしっかりしていつまでも丈夫です。

三つコハゼ、四つコハゼのものがありますが最近では、四つコハゼが通人には好まれています。

○履　物

高層建築のビルが多く出来て来たり、舗装道路の完備から、和服の履物が変化しつつあることは、時代の推移ともいえましょう。

足駄、高下駄などは、田舎に行かぬ限り、殆んど必要がなく、雨の日も都会では駒下駄に爪皮をかけて用をなすようになって、ふだ

んは駒下駄よりも草履が多くなったのも、戦後の姿です。

本皮のエナメルよりも、ビニール製の色の美しいのが安く売られているので、最近では、足元がすっきりとしてきました。

黒、黄、白などから、薄色のもの、きものに似合う色がよいし、背が低いからといって、無暗みに高い草履は足元が重くるしい。

履物の手入れも必ず出先から帰ったら、すぐにして置くのがおしゃれですし、長持ちの秘訣とも言えます。

☆着物の手入れ☆

洗濯のきいたものを、いつも身につけていることほど楽しいことはありません。まる洗いが出来ないことが、自然和服をいとう気持にもなるので、これが欠点ともいえましょう。

ここでは外出着の手入れを主としてお話しましょう。着がえをした着物は、蔭干しをして、まず、袂の底のごみを取り除き、衿、裾、袖口等の脂肪の垢は、ていねいに揮発油で、取り除き、それでもとれないよごれは、微温湯を、ガーゼにしませて静かにふき取ります。

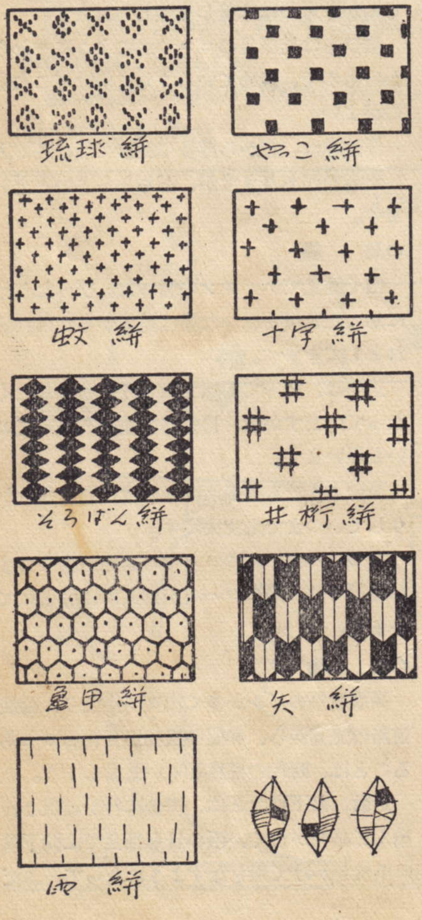
小皺はアイロンでのばし、正しく畳んでしまいます。

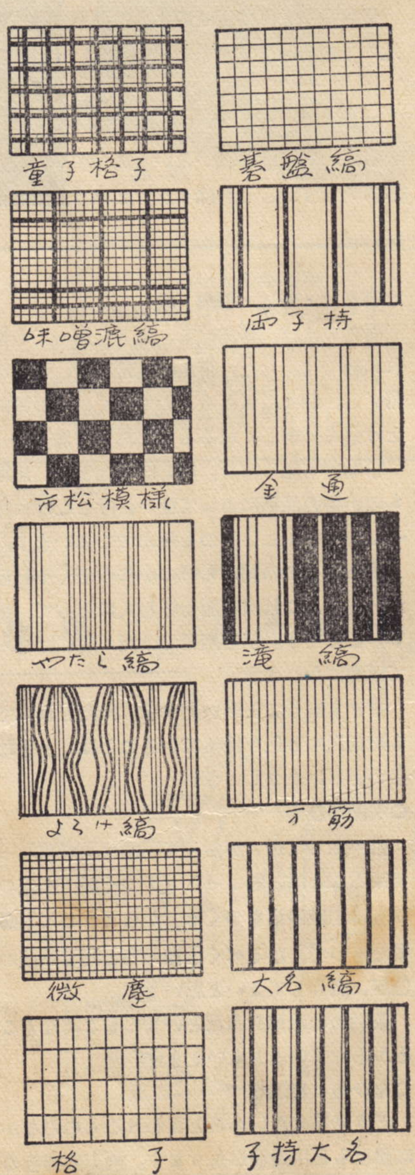
和服を長持ちさせる方法は、時々とき洗いをし、縫いかえしをして、布のすりきれを防ぐことです。始終着るものには、こうした手入れをしたものの清潔な美しさが、柄の流行よりも、ゆかしく感じられます。

☆絣　と　縞☆

14・5世紀の頃沖縄に南方より伝わったという絣の技術で、糸目をところどころにくくり、染料につけると、まばらに白く残る、それで織り出したものを絣といいます。この手法で幾何的な柄や模様を考え出したのが今日の絣で、その単純な美しさが一般の好むところとなり、縞と共に今も大衆の嗜好に喰い込んでいます。

手織の味も今日のように、機械文明が盛んになると、技巧にのみ重きが置かれて、真実の手織独特の美しさが失われてくるのは淋し





いことです。縞の素朴さも絣と同じ事が言えると思います。

この柄のように素直なものの美しさ、これは永久に残るものと信じられます。

☆木　綿☆

木綿は、江戸時代以降に盛んに栽培されたもので、布の本質として、光らず、丈夫で保温性と通風性もあり、春夏秋冬を通して着られるところから一般庶民の働き着、日常着として親しまれています。

「明月の花かと見えて綿の畠」これは芭蕉の句ですが棉の木に黄色い花が咲いて実がみのってその殼が割れると、中から小さい実についた白い繊維が花のように開く、それが綿なのです。

私達は戦争のおかげで純綿の有難たさをしみじみと知りました。今年は綿の最良の年とでもいいたい位、グログラン、一名タッサー等という地厚の生地が出たり、サンフォライズされたブロード、樹脂加工されたいろいろの木綿の素材がたくさんに出て真夏の麻の世界まで浸蝕しています。

ゆかたが昼着になったこの夏は、木綿の出廻ったこともさりながら、戦後の生活態度が落ついて来て、見栄に走らず実質的になってきたのだともいえましょう

☆　絹　☆

昔から女性のあこがれは絹といったものでしたが、今でも絹にまつわるあこがれは女にとって捨てがたいものですが、絹は価が高いこと、縮むこと、丸洗いが出来ないとかいうようなことが一般大衆の衣料とはちょっと、遠いものになりがちです。

最近お召なども光沢を消した木綿の感じのする塩沢ものが受けるのも一つはそんな結果からとも思われます。

結城、紬の素朴な味が喜ばれるのも同じでしょう。

縮緬類も今年はしぼが非常に高く、浜縮緬の大しぼものが歓迎されるのも、洋服地のツイードなどが好まれるのと同じことで、今年の絹物は、紋錦紗、りんず、朱子地のように偏平な生地に光沢のあるものよりも素地がごつく、それに金属性の光る、ラメ風なものや、同じ漆(ウルシ)にも金銀の光をからませて、夜のきものとしての登場といえるように、きものにもそれぞれの目的を考えて作られつつあります。

☆化　繊☆

戦後の衣料界に大きな出現をしたものは、なんといっても人造繊維、通称化繊でしょう。

布地は綿から、かいこから、羊毛から、麻からとばかり知っていた自分達にとって、石炭、材木、石灰が人間の肌をくるむものになるとは、想像もつかなかったことです。

科学の進歩は天然繊維を遙かに凌駕する近代感覚を持った繊維を創っています。

値の安い、丈夫な、色のよい広幅ものであること、その上、年々良質のものに改善されていることは、大衆衣料として安心して使用出来ることです。

☆和服の基礎縫☆

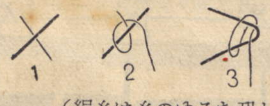
1.　糸の結び方

イ　こま結び＝糸の両端を取り、図のように結び合わす（中途で糸をつぐ時）



ロ　留め結び＝主に縫い始める時糸を指先にまいて結ぶ

ハ　はた結び＝中途で糸をつぐ時に用いる。



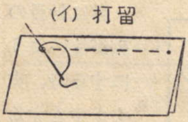
（主に躾、耳絎の際の糸の不足をおぎなう場合

（絹糸は糸のゆるむ恐れがあるからこの方法を用いない）

2.　糸の留め方

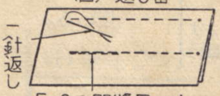
縫い終りに針を当て左の拇指でおさえ、

(イ) 打留



右手で二度程糸を巻き、左拇指で更におさえ、右手で引き締める仕方。（主に袖下、胴接ぎ、伏せ縫い等の軽い留めに用いる。）

(ロ) 返し留



5~6の間縫目にそって縫い返えす

（主に背、脇、衽等の裾口及び衽先に用いる。）

(ハ) 抄い留

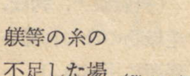


小針に一針返えし二度程糸を巻いて引き締め更に4~5センチ縫い返えす

（主に単衣の袖口、袖付、身八ツ口、衿先等のように確りと留める箇所に用いる。）

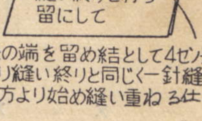
3.　糸の継ぎ方

(イ) 結び継



はた結びと同様の仕方で継ぐ。（耳絎、躾等の糸の不足した場合に用いる。）

(ロ) 重ね継



継ぐべき糸の端を留め結として4センチ程手前より縫い終りと同じく一針縫い込みの方より始め縫い重ねる仕方

（主に脇縫、衽付等の場合に用いる。）

(ハ) より継＝継ぐ方の糸端を４～５センチ程二つに割り、その一方は前の糸端をより合わせ、更に残りの一方をより合せる仕方。

（主に絹布類の縫い方又はくけ方の場合に用いる。）

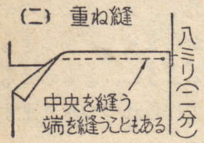
4. 縫い方

イ　合せ縫い＝布２枚を合せ、ぐし縫いにする仕方。手と手の間は20～25センチで普通４ミリ（１分）の針目で縫う。

ロ　二度縫＝普通の合せ縫の先をもう一度縫う、縫い目の力を強める為と２枚の布が開かぬ為主に背縫等に用いる。

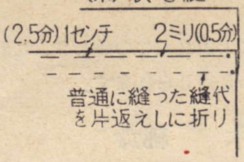
ハ　袋縫＝布を外表に合せ、４ミリ程の縫い代に縫い、被せを浅くして折をつけ、裏に返えし、更に普通の縫い代で縫う仕方。主に単衣の袖下、四ツ身、三ツ身の背縫い、三ツ身縫一ツ身の衽付等に用いる。

(ニ)　重ね縫



布と布とを８ミリ重ね、その中央を縫う、紐芯、帯芯等をはぐ時縫い代がかさばらないようにする。

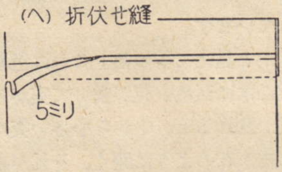
(ホ)　伏せ縫



普通に縫った縫い代を片返えしにし、縫い代の端より２ミリ内を裏に１センチ～1.5センチの針目に表は極小針に出して縫う。

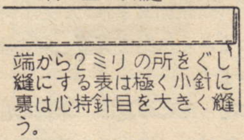
（主に布の耳を利用し縫い合せ等に用いる。）

(ヘ)　折伏せ縫



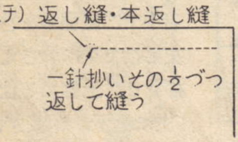
布端の一方をずらせて縫い、長い方の縫込みの先を折って、伏せ縫いにする。裏のつかないものの縫い込みをきれいに仕末する時、裁目のほつれを防ぐ為に用いる。

(ト)　三つ折縫

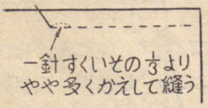


風呂敷のふち、肌襦袢の裾などこの縫い方をする。

(チ)　返し縫・本返し縫



半返し縫



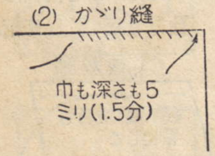
特に針目の動かないようにする時、丈夫を主とする時、ミシンの代用の時等に用いる。

(リ)　突合せ縫



接ぎをする双方の布端を裁ち揃え、これをつき合せて図のように縫い合わす。地厚の物、帯芯、衿芯等の接ぎ合せに用いる。

(ヌ)　かゞり縫



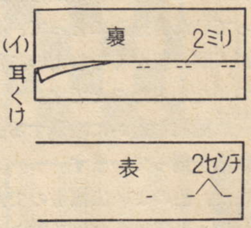
裁目の布端をほつれぬよう図のようにかがる。

（衿肩明き、釣衽、毛織物のほつれ易い場所に用いる。）

×　×　×

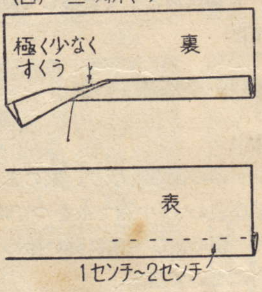
5. くけ方

(イ)　耳くけ



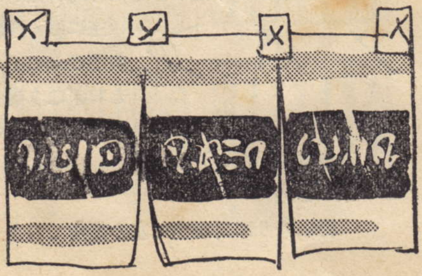
布の耳を絎けつける仕方。裏に二針、表に一針、木綿単衣の振、脇、衽、襦袢の馬乗等の縫い込みの仕末。

(ロ)　三つ折ぐけ

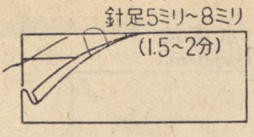


いずれも流れ針にならぬように注意する事。

単衣の袖口、衿下、裾絎等。



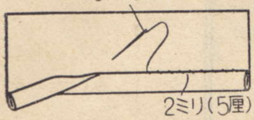
(ハ) 本ぐけ



折山の稍々内側をくける仕方。流れ針にならぬように注意すること。(主に紐、帯、綿入、袷の衿下等に用いる。)

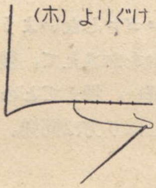
又綿入の袖口、衿絎等のように一方の布端を折って絎けつける場合もある。これを折絎という。

(二) まつりぐけ



折りのつけにくく特に折山をおさえたい時に用いる。(毛織物はこの方法にする。)

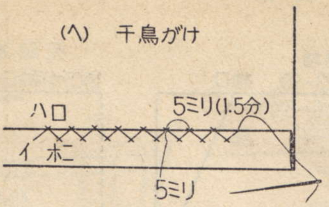
(ホ) よりぐけ



布の端を紙よりをつくる時のようにしっかりひっぱっていて指先で細くよりこみながらまつりぐける。

薄物の単衣の袖口、幅の狭い単衣の八ツ口などにつかう。

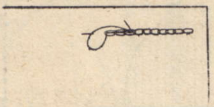
(ヘ) 千鳥がけ



ロハは表をすくい、次はニホの針は表に出さぬようにする。

縫込みや、折代を伏せる時、また飾り縫いにつかう。場所により針毎に表をすくった方がしっかりする。(毛織物の裁ち目、耳をおさえる時)

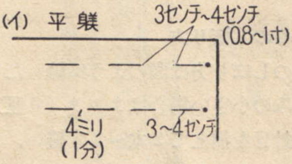
(ト) くさり縫



手芸などに多く用いられる縫い方。裏はミシンのようになる。

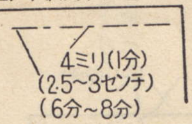
6. 躾の掛け方

(イ) 平躾

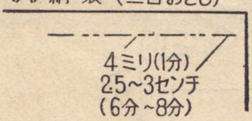


かり躾の時に用い2種類ある。

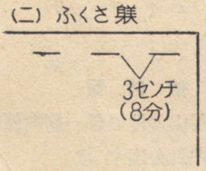
(ロ) 木綿躾(二目おとし)



(ハ) 絹躾(三目おとし)

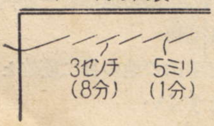


(二) ふくさ躾



ふくさ、帯等に用いる躾。表裏とも針目の大きさは同じ。

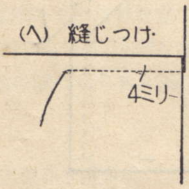
(ホ) 待針躾



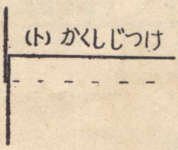
ずれやすい2枚の布がずれない為にかける仮しつけで、待針をこまかく打つつもりで針をかけ、真直ぐに針を立ててひきぬき、3センチおき位にこれをくり返えす。

☆　☆　☆

(ヘ) 縫じつけ



縮緬物などに多く用い、表を見てぐし縫いと同じ要領で表を心持小針にする。



折りのくずれない為にかける躾。そのままとらずにおき、糸は布地と同色のもの、表の針はごく小さく、裏を大きくする。

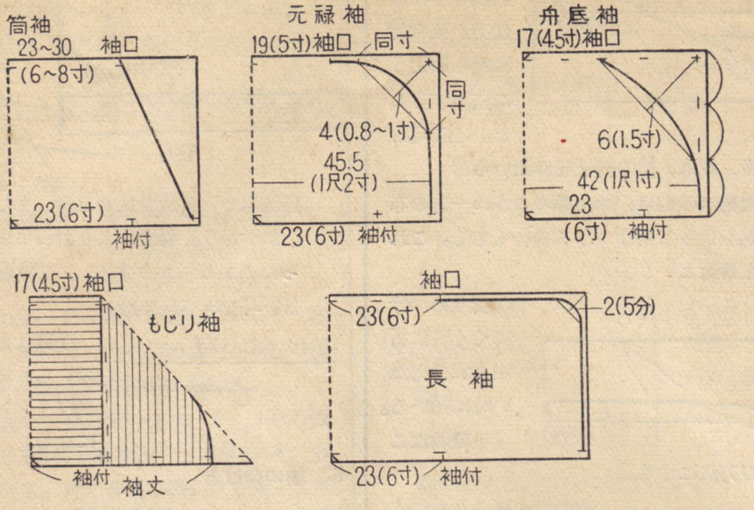
☆袖のこと☆

袖の種類には元禄袖・そぎ袖・なぎなた袖・広袖・筒袖などがあります。

元禄袖・なぎなた袖はスポーティなもの、そぎ袖は長袖等につかわれ、広袖は丹前に、筒袖は男の子となっていますが、私はその生地、柄、用途によりいずれを使用してもよいと思っております。

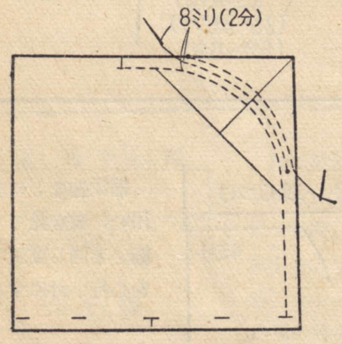
☆　☆　☆

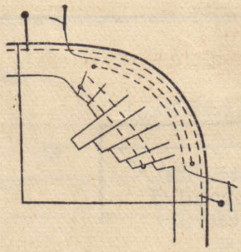
袖の種類



元禄袖の丸みのしぼり方

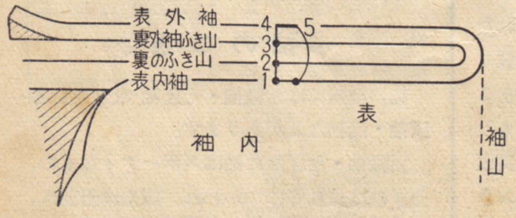
袖の丸みのしぼり方は図のように縫った2分上を（丸みの小さい場合は2ミリ（5厘）ほど外を）針目を揃えて2本～3本縫い、2ミリ（0.5分）のきせ代をかけて型紙を入れて折り、自然にしぼり、ゴロゴロしないようにしてから、アイロンで重ねをおさえて、襞折りしたところを一つずつ縫い、押えてとめる。舟底型も、元祿型も袖のしぼり方は同様。





袖口四ツ留の仕方

袖口、四つ留



1. 表内袖きせ山の 0.1 センチ内を裏から針を出し
2. 裏のふき山をすくい
3. 裏外袖のふき山をすくい
4.-5. 表外袖のきせ山の 0.1 センチ内を縦にとり
6. その針を表内袖に返し、結ぶ。

袖付留

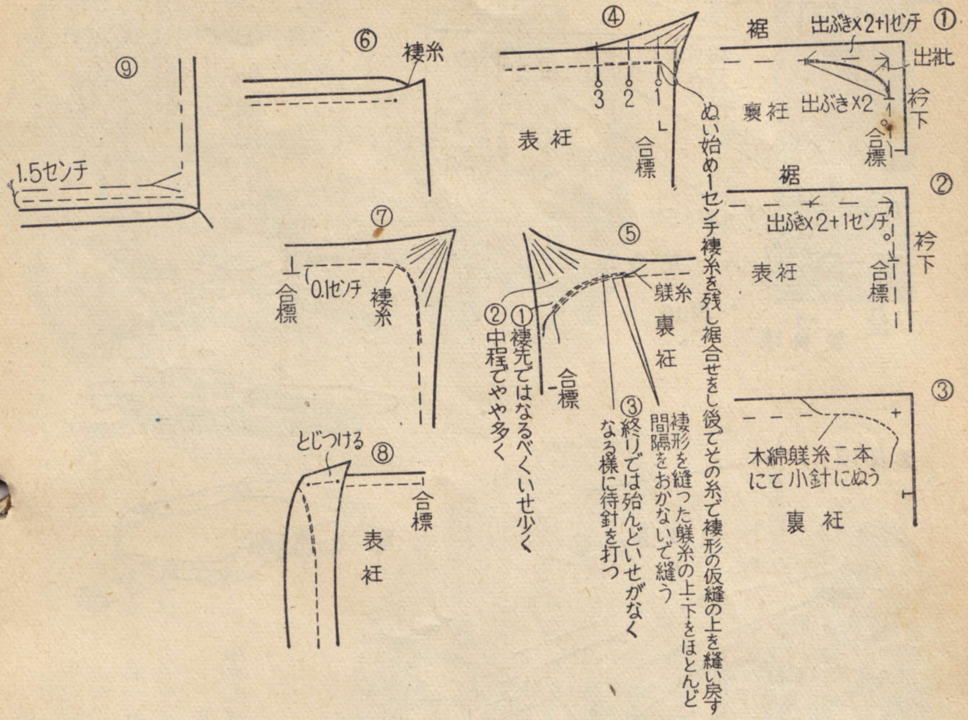
1. 表袖の折山の地の目一筋内側に中より1の針を出す
2.～3. 身頃の折山の他の目二筋位とって身身とすくい
4.～5. 裏袖の折山の地の目一筋内側を横にすくい
6.～7. 裏身頃山の地の目二筋位とって身身とすくい
8. 表袖山の地の目一筋内側に図のようにもどり、結ぶ。

袖付留



☆褄の縫い方☆

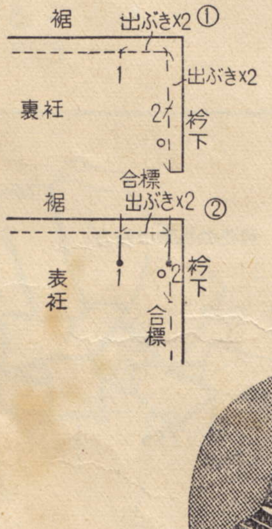
☆比較的大きな褄の縫い方☆

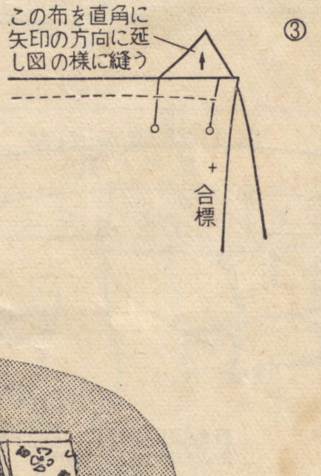


☆小さい褄の場合の簡単な縫い方☆

褄形を作らないで直ぐに②図の１に待針を立て①図の１と合せて待針を打ち

②図の２に待針を立て①図の２と合せて待針を打ち、後は③図を参照して縫い、仕上げは前の褄の6.7.8.9図の通りにする。

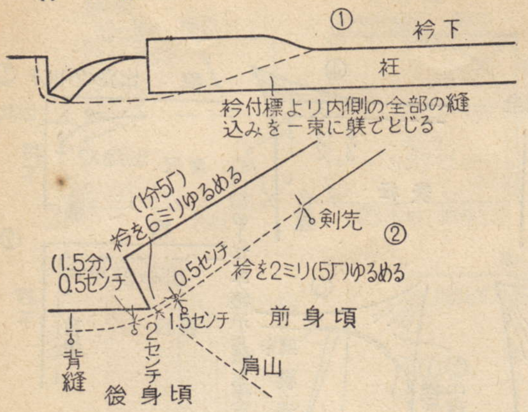




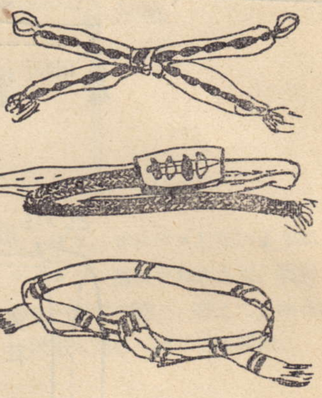


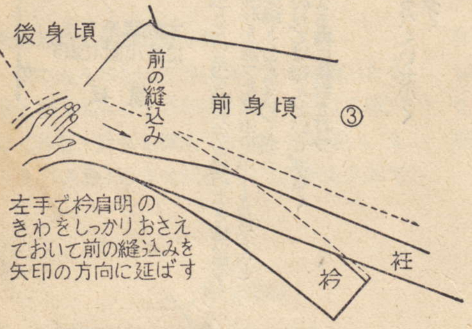
☆衿つけのこと☆

衿つけ

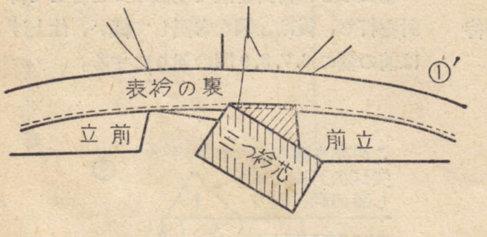


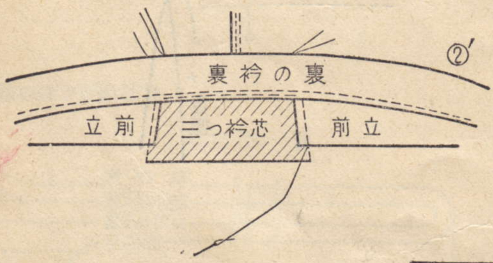
表衿と身頃全部待針を②図のように両手で打ち、裏衿の合標を合せて身頃を挟んで打ち添える。



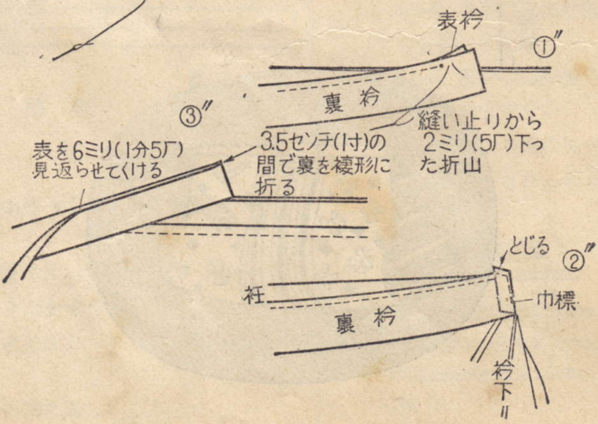


☆三ツ衿芯の入れ方図☆



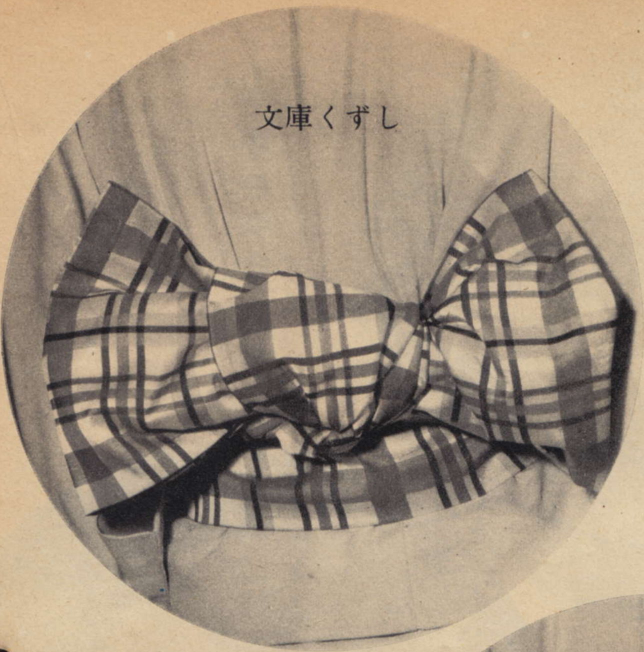


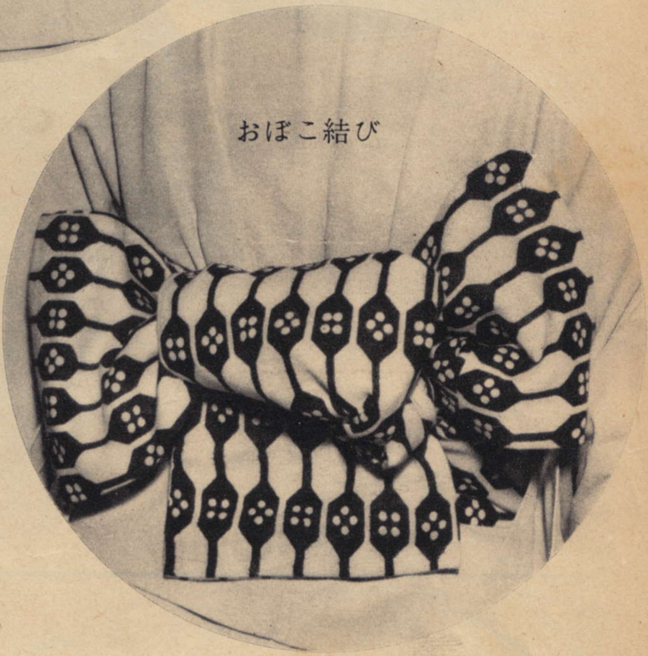
衿先の仕末の仕方



帯の結び方のいろいろ

——細帯の結び方例——

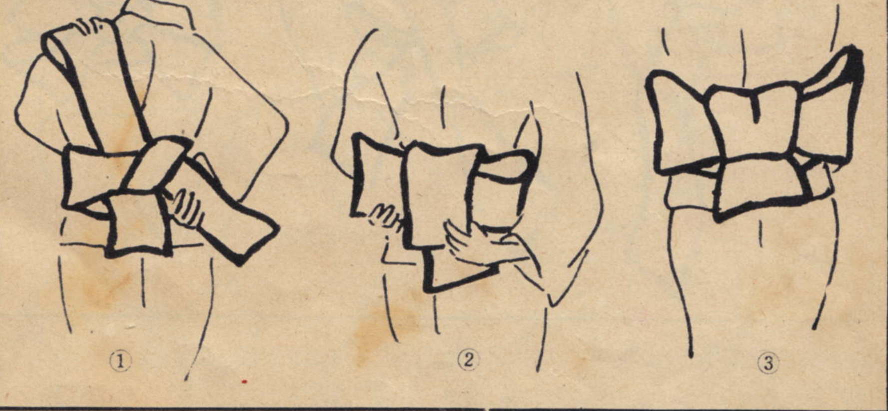

文庫くずし


おぼこ結び

細帯の出来上り寸法

	幅	丈
六尺帯	七寸五分（二八・四）	六尺五寸（二四七）
八尺帯	五寸五分（二〇・八）	八尺（三〇四）
七尺帯	二寸七分～二寸八分（一〇・二～一〇・六）	七尺五寸（二八五）

おぼこの結び方



① 「て」を下になるように「たれ」は抜かないで「わ」を作ります。② 手を持ちかえて「て」を左の方へもってゆき、「わ」を「て」の中側から通して結びます。③ 結び上り。

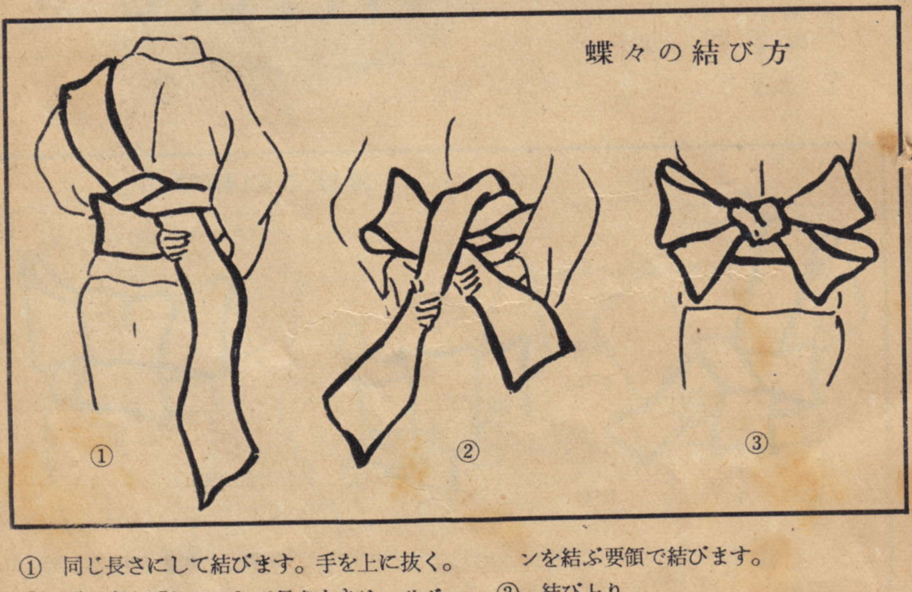
―細帯の結び方例―



蝶々結び



リボン結び



① 同じ長さにして結びます。手を上に抜く。

② 下の方を「わ」にして長さをきめ、リボンを結ぶ要領で結びます。

③ 結び上り。

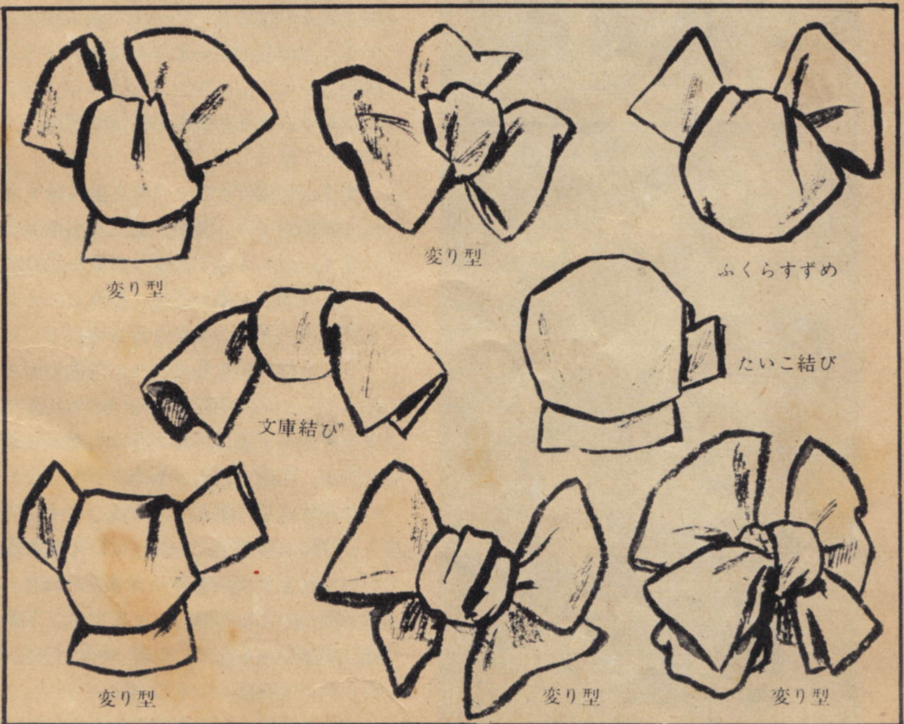
細帯の結び方例



双葉結び



参考・たいこ結びの例
（寸法は名古屋帯標準）









長　着　の



馴れてしまえばなんでもないことなのですが“きものは着たいが一人で着られない”ということは今の若い人達みんなのいう言葉です。

これは、普通の長着の着方の順序を、写真で示して見ました。

まず、長襦袢をぴったりと着つけます。つい丈の場合でも、腰紐をしてから衿元をととのえて、ぶくぶくした残りを紐か伊達締でギュッとしめてしまいます。こうして下ごしらえが出来てからきものを着ます。

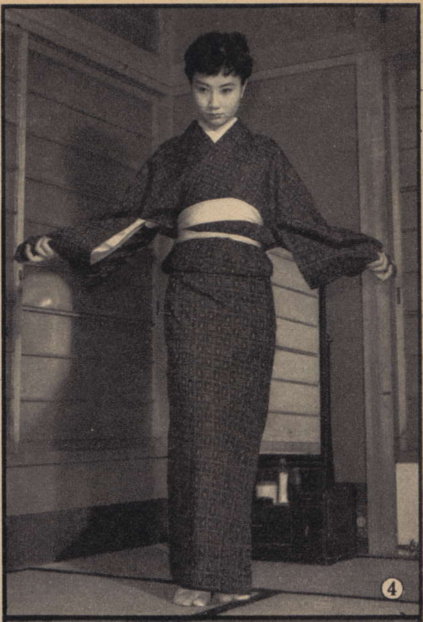
1. 上衿の先を揃えたり、両袖の裄丈を揃えてから、足の内股をくっつけて、後身に身幅をダブダブ遊ばさぬようにしながら後裾を長目に、下前を深く、褄先を背中心よりやや釣り気味にしてまといつける。

その時上前が重なってきて、下前の脇縫目がかくれるまでかきよせます。それは、脇縫目が正しいところにある証拠です。下前の脇縫目が褄下からはみ出た着つけはだらしない感じがして見にくいものです。

これは前幅寸法の不足にもよりますから縫

着　つ　け









う時に注意しましょう。

2. 腰紐の位置は、各自の紐の一番締めやすい、落着きやすいところに締める。

腰紐だからといって腰骨にしめても馴れない人には、からだの動作で、着くずれがします。

3. 衿や胸元をととのえて、下前にあるお端折を上前と一緒に下におろさず、胴の細いところにゴロつかぬようにととのえる。

4. ちゃんとととのえてから紐でしめる。

5. それから伊達巻きをする。

4の紐をせずに直接伊達巻をすることもありますが、この伊達巻は4のコースでやった残りのゴロゴロを、万べんなく平にし、帯を締めやすいようにする役目なので、4のときに伊達巻でしない方が工合がよろしいです。

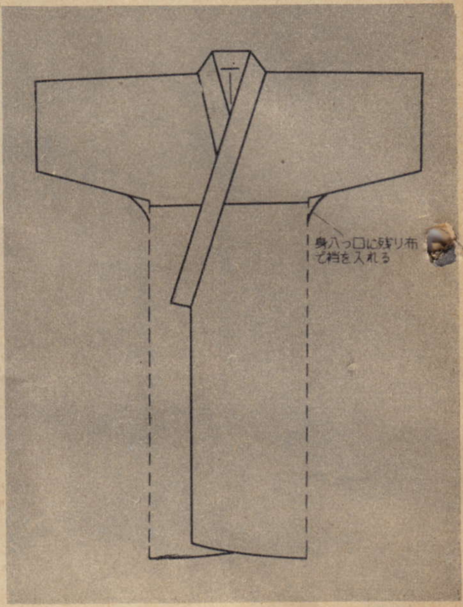
6. ここでは、一まわしの帯をおすすめする。

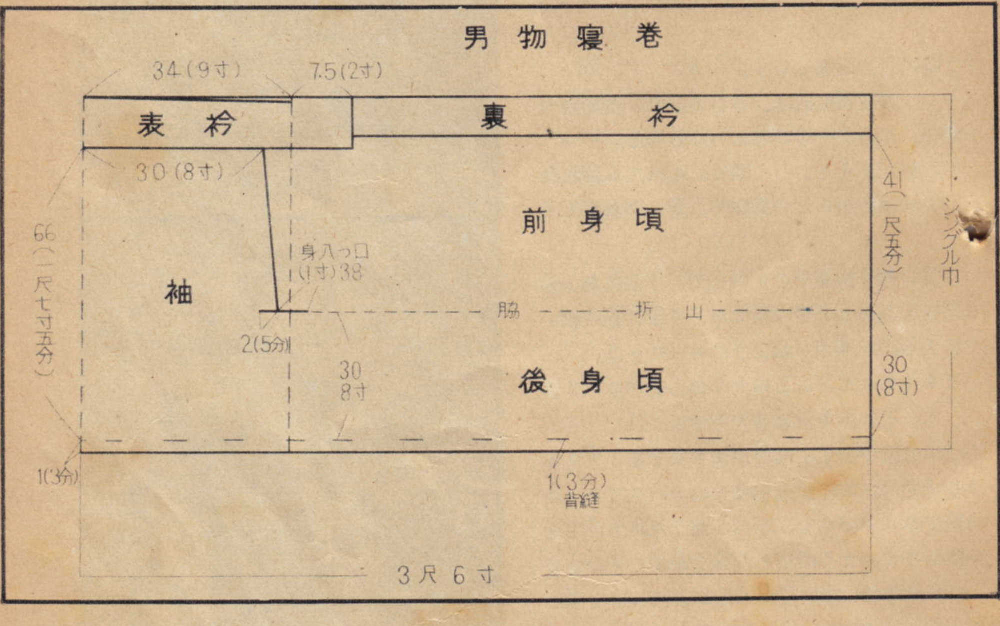
一まわしでも名古屋帯と違って、前は二重になっているし、二度まわすよりからだに重圧を感じないから、なれない人にも楽。必ず手は上にとり、結んで下に抜きます。

7. 8. 前と後の出来上り姿。



脇に縫目なしの男のきもの





☆縫い方☆

○前身頃の上布と下布を接ぎ合せ、縫代の仕末は片返しにして、押えミシンをかけます。

○背は二度縫いにします。

○肩当をミシンづけします。

○袖下を縫い、袖口は三ツ折縫いにします。

○襠を入れます。

○衿下及び裾を三ツ折り縫いにします。

○衿つけはワンピースと同様にし、衿幅の中央をミシン縫いします。

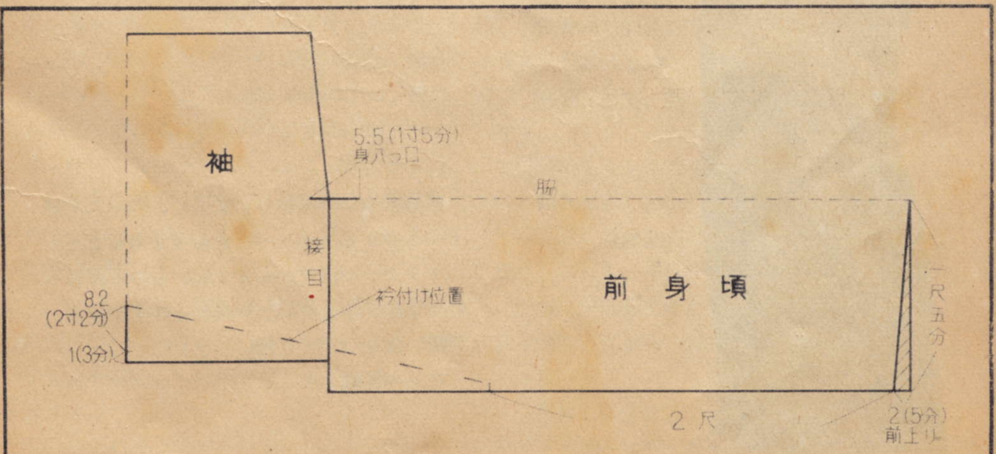
○紐を背中心につけます。

洋服の上にも羽織れる 男物はんてん

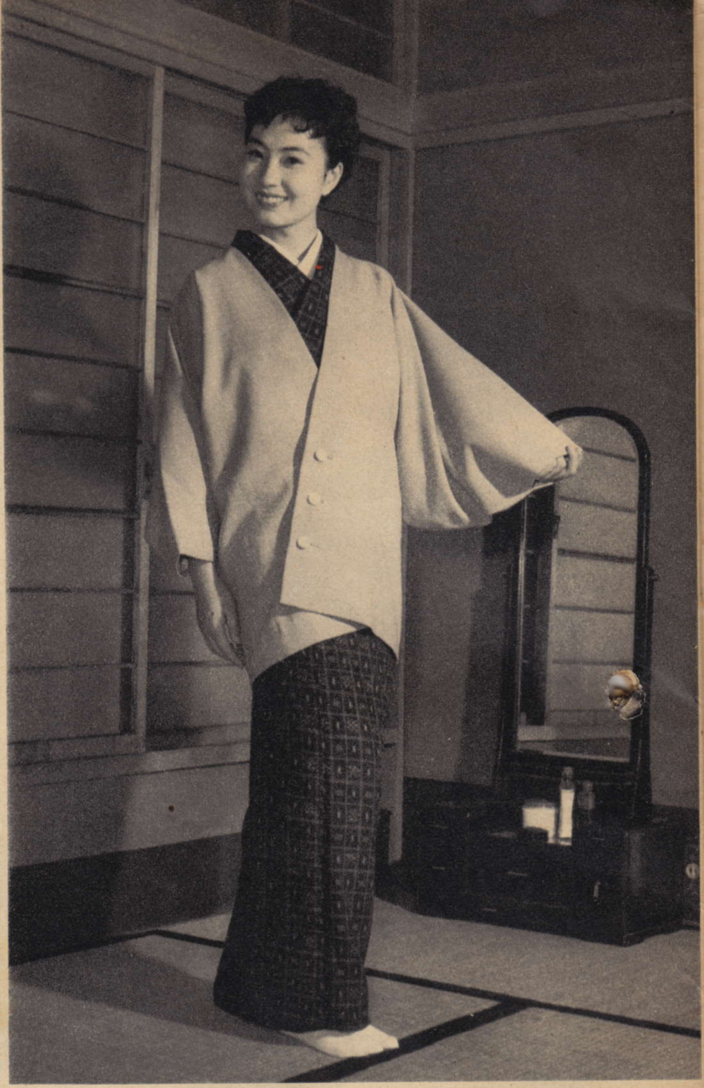


これははんてんの作り方と同じで、洋服の上着を脱いでくつろぐ時に、セーターよりもあたたかく日本座敷にもぴったりします。両面着れるようにリバシブルに作ってみました。（一五頁参照）

袖口８寸（30センチ）
袖付９寸５分（34.5センチ）
袖幅９寸５分（36センチ）
身丈２尺（76センチ）
後幅８寸（30センチ）
前幅衿明直下
衿幅１寸５分（5.5センチ）

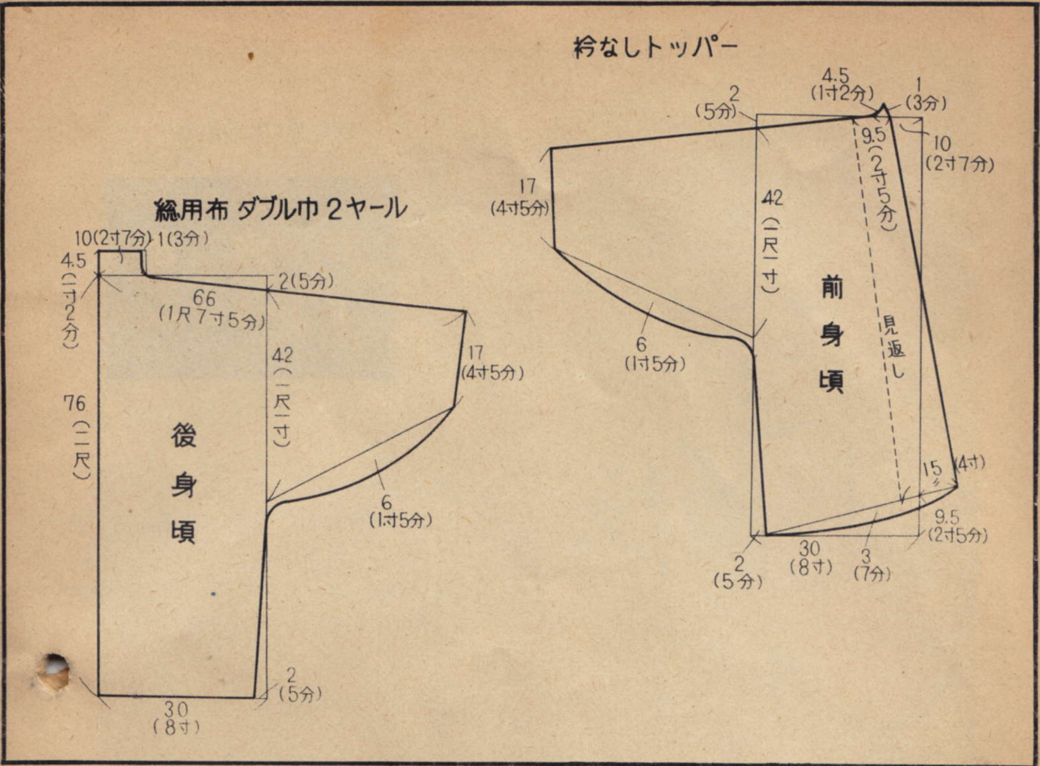


衿なし
白いトッパー





洋服のセンスがあり、暖かく、しゃれた感じのものとしてトッパーをおすすめします。
トッパーの着丈のあまり短いものも野暮ったく感心できません。W幅をそのまま使い、肩縫い目をつけて立衿にしました。
要尺＝W幅２ヤール



☆製　図☆

縦76センチ（2尺5分）、横30センチ（8寸）の矩形を基準として製図します。

後身頃

○背中心から衿肩明10センチ（2寸6分）、ハイネック分4.5センチ(1寸2分)をとって四角にし、ハイネックの上で1センチ（3分）の傾斜をつけ、ネックの線を引きます。

○肩山で2センチ（5分）下げ、衿肩明10センチ(2寸6分)の位置を結んで延長線を引き、裄を66センチ（1尺7寸4分）とります。

○袖つけ寸法37センチ（9寸6分）、袖口17センチ（4.5寸）を肩線に直角にとり、袖下の線を引き、袖の形を図のように、袖下で6センチ（1寸6分）とって形よく引きます。

○裾線の脇で2センチ入れて袖下から脇線の形を結びます。

前身頃

○肩線、袖下、脇線は後身頃と同じです。衿肩明10センチの所からハイネック4.5センチを基礎線に、ハイネック1センチ上げて引きます。

○前中心線、裾線から9.5センチ（2.5寸）上げ、脇裾の位置と結んで延長線を引き、中心線から9.5センチとります。その点とネックの点とを結んで前端線とします。

裁ち方

○表裏身頃は、基礎線に縦地を通し、

○見返しと芯は、前端に縦地を通して裁ちます。

○後ハイネックの見返しと芯は、バイヤスで裁ちます。

縫い方

○表身頃の裏に芯を据え、ボタンの位置に玉縁穴をあけます。

○肩線と袖下、脇を縫い、アイロンで割ります。

○後衿ぐりから前端にぐるっと見返しをつけ、縫代を芯にとめつけて、表に返します。

○見返しの奥を芯にとじつけ、裾と袖口を標通りに折り、千鳥ります。

○裏は肩と脇を標より2センチ外を縫って、後身頃の方に返し、表身頃と縫い目を中とじします。

○見返しに全部裏をまつり、袖口は表より2センチ控えて裾は奥まつりをします。



——大きな衿の——

若向き トッパー

要尺＝W幅 2.7 ヤール

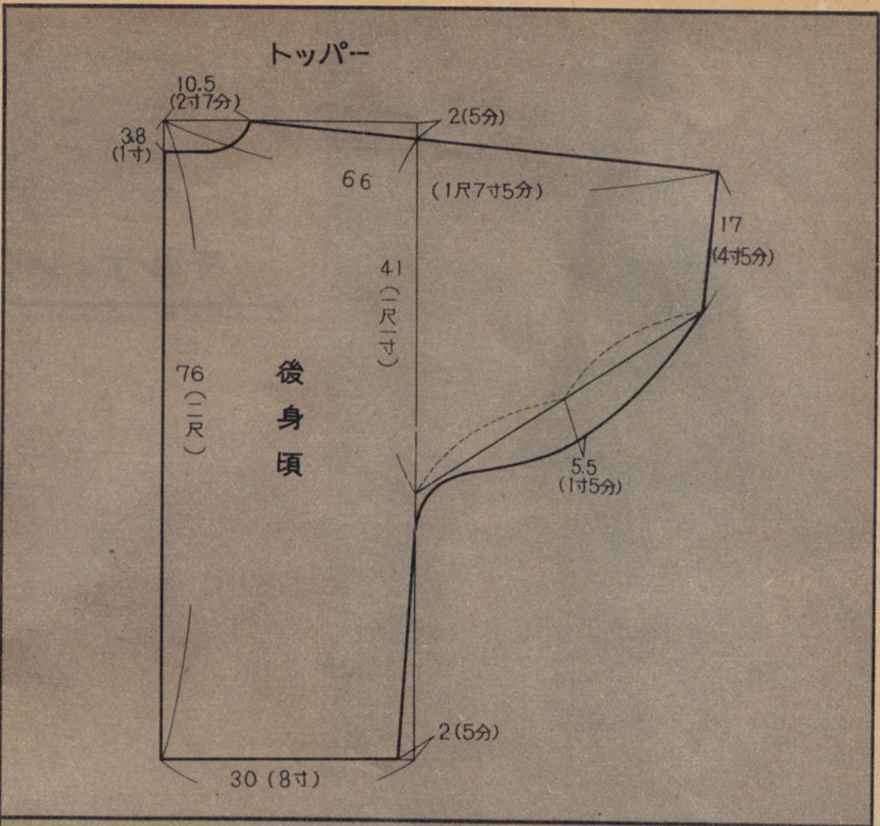
これは衿を大きく派手にした若向きトッパーです。

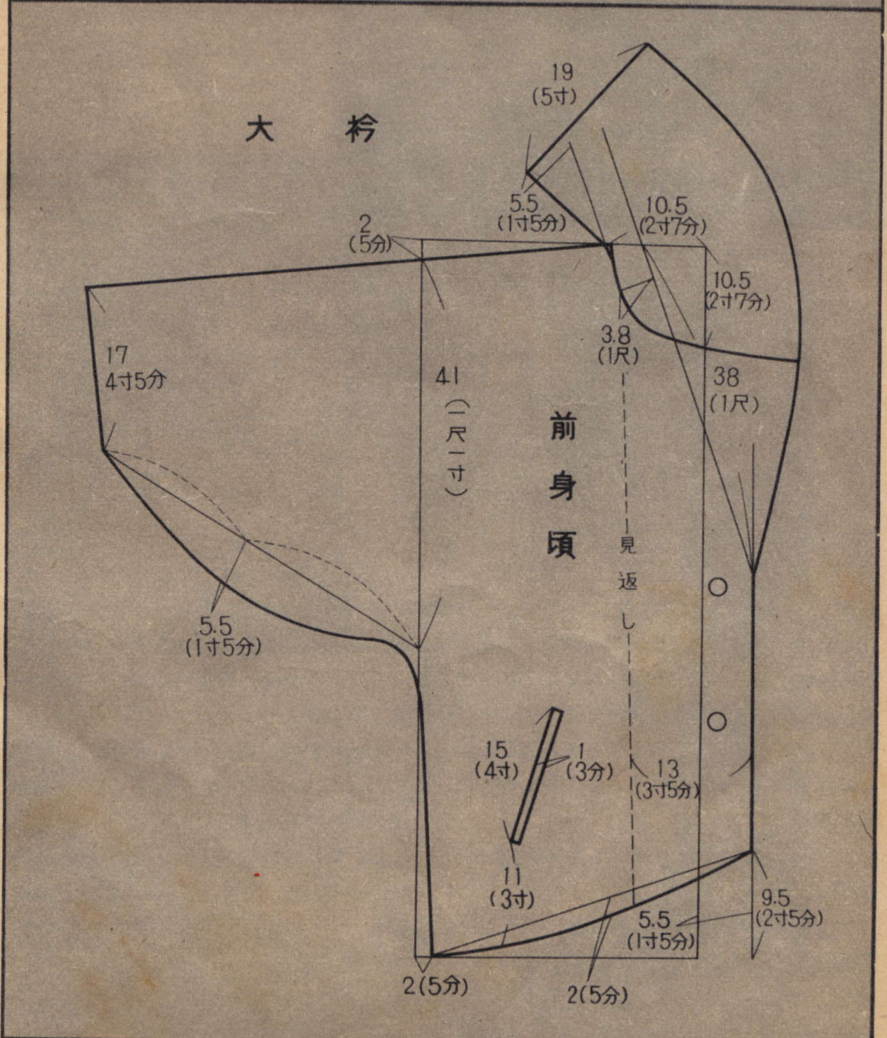
寒い時は、フードのように立てても暖かく、変った感じに着られて、面白いでしょう。

縫い方（衿の部分縫参照）

○裏衿を身頃に縫いつけて割り、見返しと中表にして、表地を端から端まで、衿の外まわりを地縫いして、表に返します。

○このように大きな衿には、布地にもよりますが、あまり固い芯でなく、シーチング程度がよいでしょう。出来るだけ柔かく仕上げたいものです。


トッパー
10.5
(2寸7分)
3.8
(1寸)
2(5分)
66
(1尺7寸5分)
17
(4寸5分)
41
(一尺一寸)
76
(二尺)
後身頃
5.5
(1寸5分)
2(5分)
30 (8寸)


大衿
19
(5寸)
5.5
(1寸5分)
10.5
(2寸7分)
2
(5分)
10.5
(2寸7分)
3.8
(1尺)
38
(1尺)
17
4寸5分
41
(一尺一寸)
前身頃
見返し
5.5
(1寸5分)
15
(4寸)
1
(3分)
13
(3寸5分)
11
(3寸)
9.5
(2寸5分)
5.5
(1寸5分)
2(5分)
2(5分)



軽くて

キルティング

軽くて暖かい、綿入刺子のことです。

これはキルティングの凹凸の面白味を出すために表生地は薄地の物の方がよいと思います。裏は何でも手近な生地で結構です。

ここでは表は黒の錦紗を使ってみました。着方の工夫でモダーンにも、おとなし向きにも着られます。

1. この場合、薄い芯布(普通の布でよい)を平に伸ばし

2. その上に青梅綿を引きます。(これは真綿では吹き出るから) 2枚通し位の厚さがよろしいです。

3. 表布を乗せる。

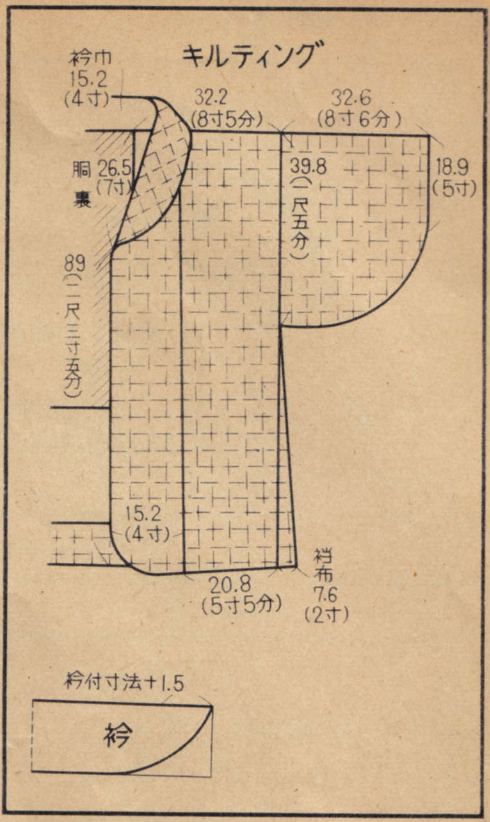
4. 線書きをしてあるハトロン紙を乗せて、躾であらく全部動かぬようにとじます。

5. ミシンをかけ終ったら、ハトロン紙を布からはぎとります。

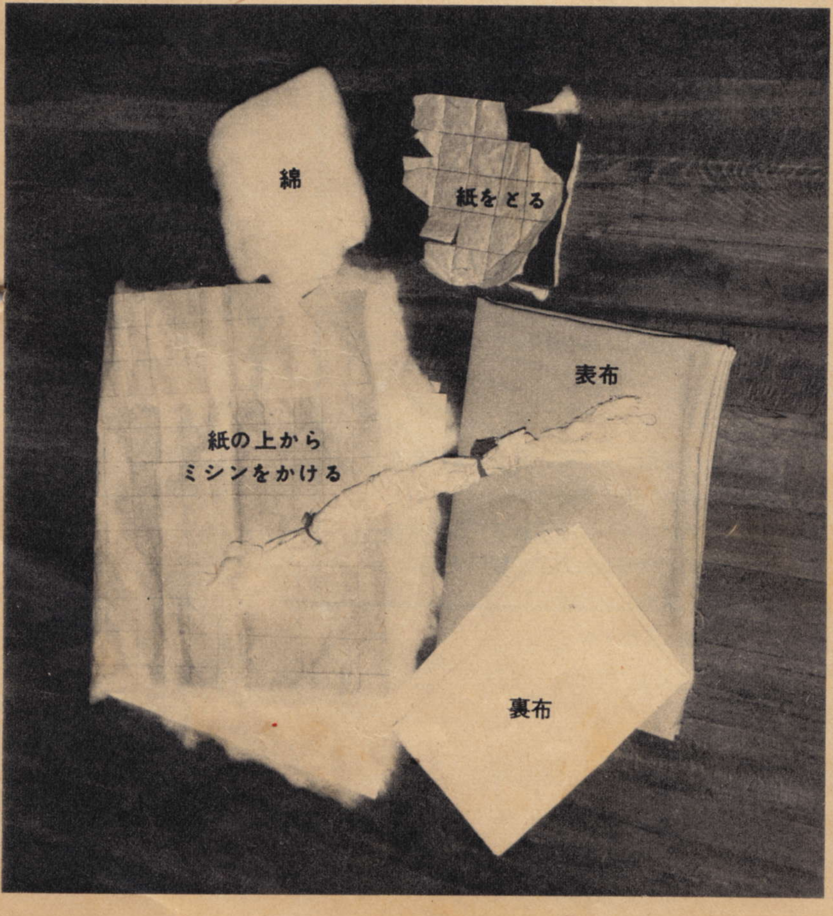
布地に張りを持たせたい場合は、和紙をよくもんで、芯布の上に1枚乗せてから綿をのせる順序にします。

袖、衿、片身頃というように、荒裁ちをしておいてから、ミシンをかけた方がやり易く、また、ミシンをすると幅が縮みますから、その分だけ2センチほど幅に余裕を見ておきます。

暖かい のコート



キルティング
衿巾
15.2
(4寸)
32.2
(8寸5分)
32.6
(8寸6分)
胴裏
26.5
(7寸)
39.8
(一尺五分)
18.9
(5寸)
89
(二尺三寸五分)
15.2
(4寸)
20.8
(5寸5分)
衽布
7.6
(2寸)
衿付寸法+1.5
衿



綿
紙をとる
表布
紙の上から
ミシンをかける
裏布

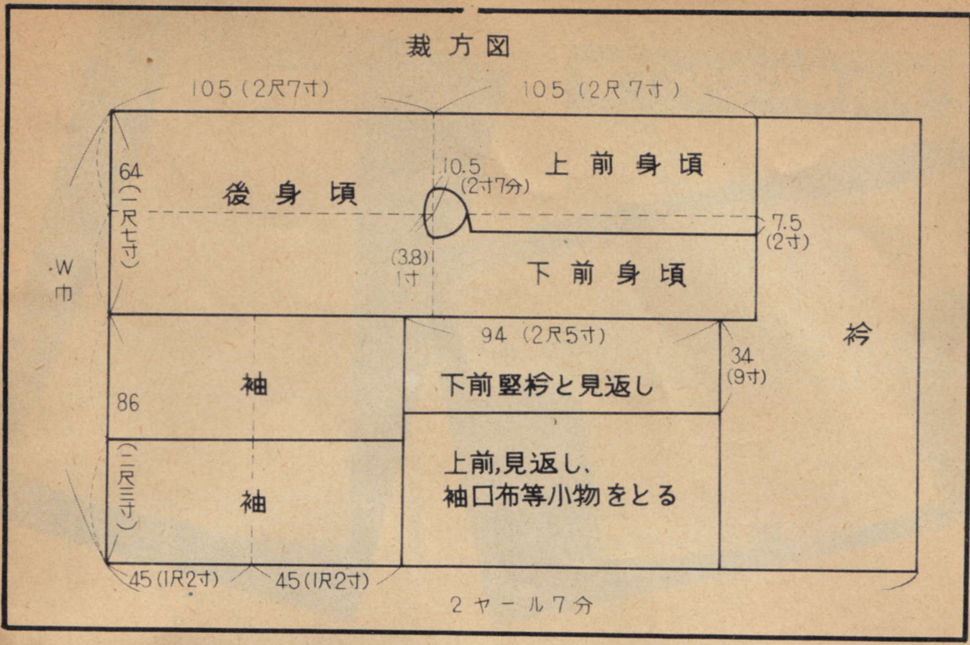
衿にドレープのあるコート

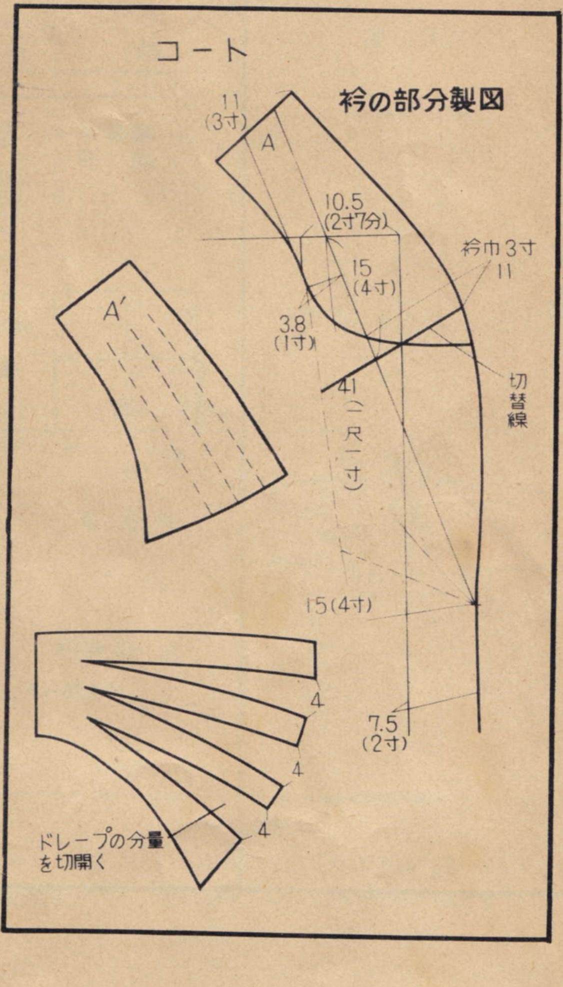


ウールで作ったコートは、きもの姿に軽快さを出し、暖かいし、洒落てもいます。

これは、衿にドレープを入れて変化させてみました。着丈は身長に応じ、膝位までにした方が、すっきりみえます。

要尺＝W幅 2.7 ヤール





衿の裁方

○表は後中心縦地を通し、裏はバイヤスでとります。

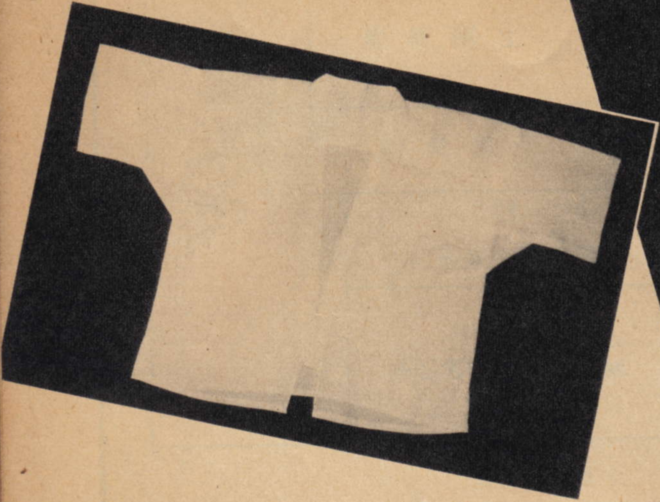
○表衿にだけドレープ分を図のように切開いて、裁ちます。（裏と芯はドレープをとらない）

縫い方

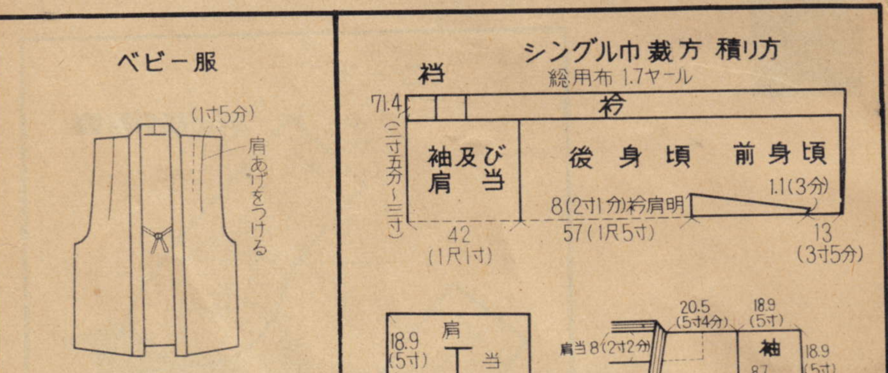
○裏衿を身頃に縫いつけ、表衿のドレープをたたみ、見返し続きの衿形を作って、衿まわりを地縫いし、表に返します。

○和服のコートの裏は、半裏に仕立て、あまり重くないものを用いた方がよろしいです。

着心地のよい下着







☆じゅばんの縫い方☆

○袖は袖下に襠布を先きにつけておきます。

○衿をつけたら、衿の縫いこみを1センチと縫代1センチを残して切ります。

○衿は三ツに折ってその⅓を衿芯にします。

○全部ミシンで縫います。

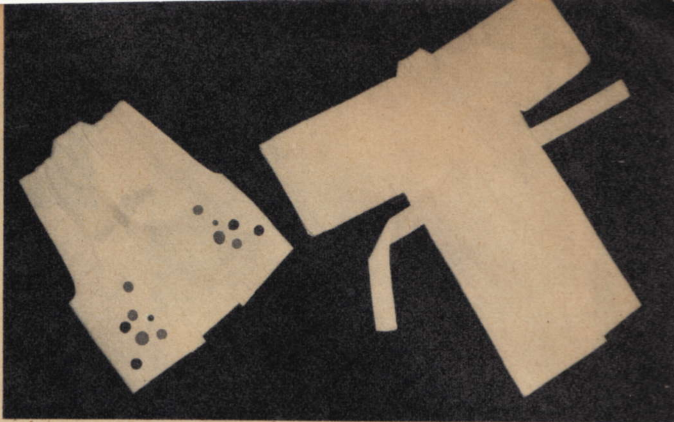
☆ペチコートの縫い方☆

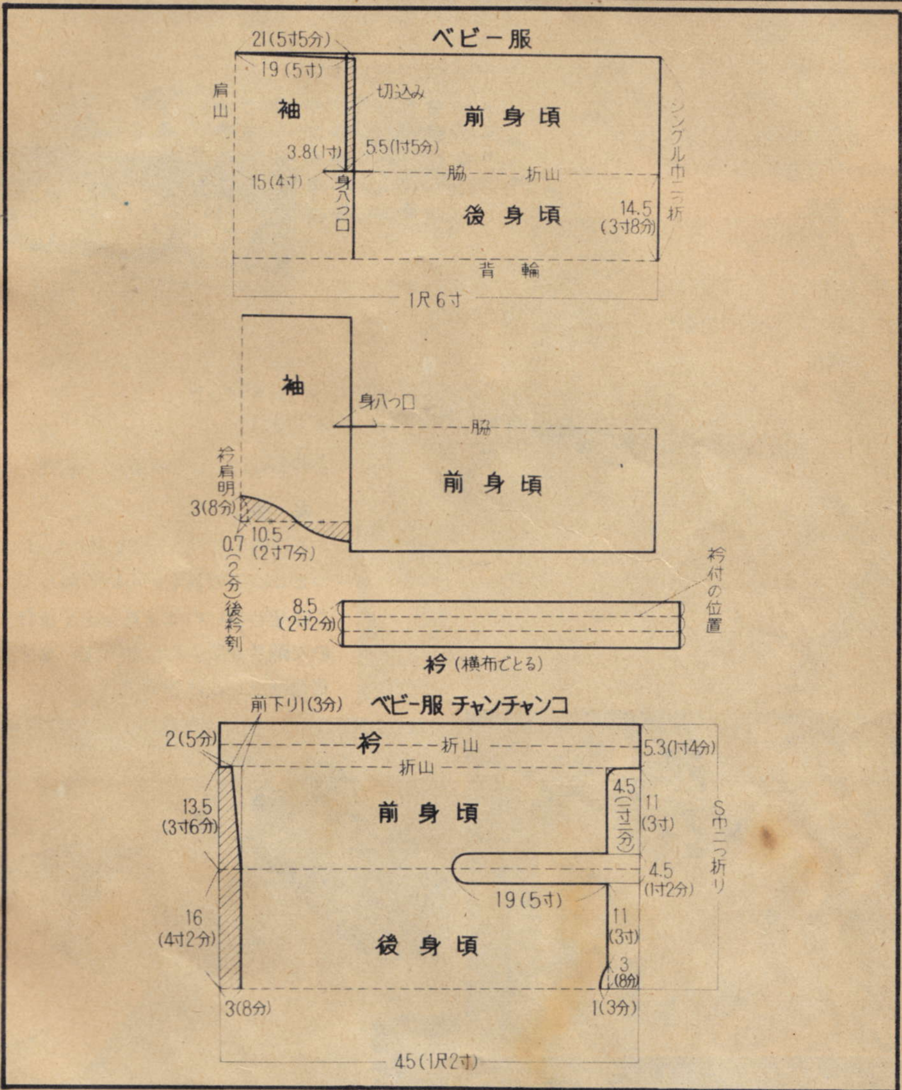
○ペチコートは型紙を先きに作ります。

○裾の方は、布を正しいバイヤスにおいて、その上に型紙をおき、布の不足分をたすときは上の方ではぎます。

○腰の方は縦布を用いて下さい。

ベビー服





☆着物の縫い方☆

○前身頃の上布に衽布を接ぎ、次に下布と接ぎ合せて前身頃を整えます。この時接ぎ代は割って縫い目は千鳥ります。

○袖下を縫い、袖口を千鳥ります。

○裾は二ツ折りにして千鳥ります。

○衿は図のように衿布の⅓を縫代としてつけ、その縫代を衿芯として出来上り衿幅に整えて、裏衿はそのまま縫い目に千鳥ります。

○袖振り、身八ツ口の明はスカラップで仕末します。

☆チャンチャンコ☆

○図の裁ち出し衿の中心を縫い合せ、衿ぐりに合せて縫代を浅くはぎ合せます。

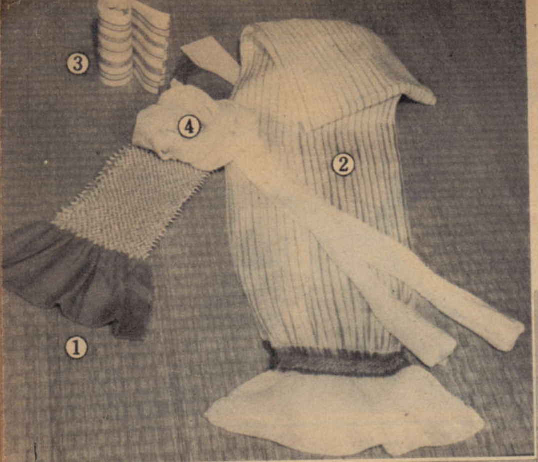
○裾、袖ぐりを千鳥ります。

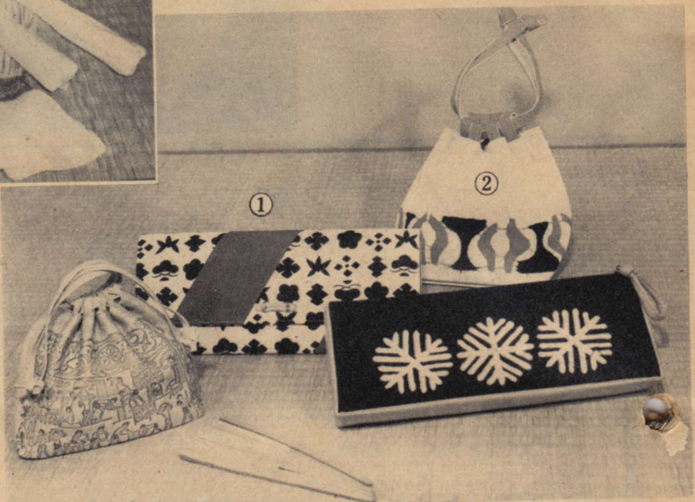
○衿を羽織のように折りだし、三ッ衿（首廻り）のみは細く、出来上り衿幅に整えて、奥をくけます。

○袖の角から１寸５分（５センチ）のところに肩あげの山がくるようにつまみ、紐をつけます。

出来上りにフランス刺しゅうかアップリケをすると可愛らしいものです。但し洗濯に堪える色を使いましょう。

和服の アクセサリー



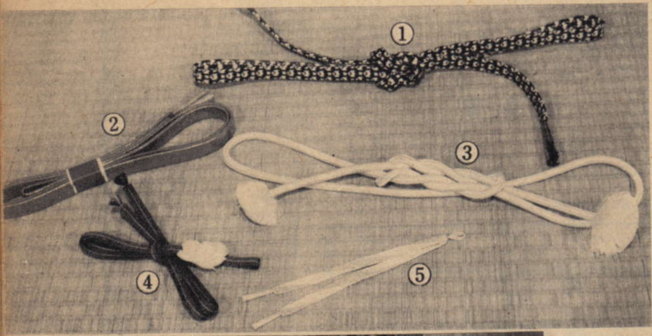


帯上げと紐

1. 鹿の子の総しぼり。
2. 柳しぼりの模様のもの。
3. 博多の伊達巻。
4. 錦紗の腰紐。

帯〆

1. 亀甲織の帯〆　2. 平打　3. 丸打　4. 象牙の帯留つき　5. 羽織紐



ハンドバッグ

1. 横長の抱えバッグ　2. 紐つきの手提げ、皮の焼絵の手提げ

足袋

たびにも二つ、三つ、四つ、五つとこはぜの数もいろいろあって、こはぜの多いのは足首を深く包むので踊りや茶人用になっています。普通は三つこはぜです。







傘

折だたみのものは、携帯用によいが、濡れている時の扱いを上手にしないと痛みやすい。

はき物

1. 本皮エナメル＝近頃草履も低いのが流行しています。
2. 薄いローズ色のビニール製
3. 桐の関西好みの後鼻緒
4. 日より下駄＝歯にゴムを張って、音を防いでいます。ビニールの爪皮も新しいところ。

コートの参考











昭和30年 9月15日印刷
昭和30年 9月20日発行　NHKラジオテキスト　女性教室 No.11 10月号　定価60円 〒8円

編集人 日本放送協会　発売所 日本放送出版協会 東京都千代田区内幸町2の12
振替東京 49701
発行所 財団法人 ラジオサービスセンター
発行人 松田寅雄
印刷所 株式会社 細川活版所 東京都中央区銀座西6の2
東京グラビヤ印刷株式会社 東京都品川区五反田1の413

財団法人　ラジオ　サービス　センター刊　定価 60 円　IBM1345